

---

# Red Blue ~灼碧の瞳~

麦畑葉月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Red Blue（灼碧の瞳）

### 【Nコード】

N8632X

### 【作者名】

麦畑葉月

### 【あらすじ】

この日本には、誰にも知られていない村が存在していた……。その村の名は大和村と呼ばれており、人口は千人と少ない村であった。

そして。

ある年の……。

とても、暑い夏の日。

濃霧と共に災いがこの村にふりかかる。

そして、この災いこそが。

全ての始まり

この災いから全ての物語が始まるのだ。

灼碧の瞳を持つ男の物語が……。

始まるうとしているのだ。

まずは、その男が覚醒した時の物語を語ろうか。

この物語は、すべての物語の序章である。

## 第一部 第一話 とある空間にて？（前書き）

ここでは、まだ主人公でないですいませんが、あしからず（…）  
（…）。

## 第一部 第一話 とある空間にて？

とある空間があった。

そこでは、真っ暗な暗闇が広がっており、その中で一か所だけぼんやりと光りが当たる場所がある。

その場所には、チェステーブルが置かれており、その前に置かれた椅子には一人の真っ白なローブで身を包んだ、真っ黒で長くウェーブのかかった髪を持つ男が腰かけていた。

男は、普通のチェスの駒とは一風変わった駒を手でいじくりながら、ため息を吐いた。

男は憂鬱な面持ちであった。

その理由は、自分の目の前に二人の男女が座っているからであり、またその二人が沈黙を続けているからだだった。

その二人のうち、男は山高帽をかぶっており、ジェントルマン風の恰好をしていて端正な顔立ちをしていた。

その男に関しては良いのだが、山高帽をかぶった男の隣に腰かけている、真っ赤なワインドレスに金髪のロングの髪をなびかせている女の方は、この男は苦手としていたのだった。

それはもう見ているだけで、イライラを感じてしまうくらいに苦手であった。

「それで???お二人様。ついに始まる物語の門出に何の用なのかな?ただ見に来たのか・・・?それとも、邪魔でもしに来たのかな?」

男は二人が沈黙し続けている事に我慢できなくなり、そう切り出した。

すると、女がホっとしたように息を吐くと、せきを切ったかのように話し始めた。

「ああ良かった。もう喋っての良いのかしら?良いのね。ありがとう。」

さっきのあなた、すっごくイライラしてたようだから、ずっと我慢していたのよね。これでも我慢してた方なのよ？いつもの私にしては、黙っていた方でしょ？だって、いつもの私だったら、1分も沈黙を守り続けるとか無理だったわね！！多分、実行しようって考えただけで、ゲボが出そう。あ、今は失言ね。失敬。それにしても、やつと始めるのかしらね？この物語の第2章を！！！！」

その声には、艶やかで妖艶な響きがあった。普通の男なら彼女に話しかけられるだけでも、どうにかなってしまふというくらいの声であった。

しかし、二人の男はやや“特殊”であるがために気にしなかった上に、女は興奮しているせいなのだろうか、無駄に長い話を弾丸のようにしたので、その声にはその魅力は半分以下になっていたのだった。

と言うよりも、その魅力は全くなかったと言ってもいいのかもしれない。

女がそんな声で、話し続けているのを黙って男は耳を傾けて聞いていたが、最後の言葉に顔を盛大にしかめた。

それに女は気づき、弾丸のように言葉を放つのをパタッとやめると、ジッと男を見つめて様子を見てから尋ねた。

「ねえ。私の言った言葉に気にさわる言葉でも混じっていたかしら？もしそうなら、正直に言ってほしいのだけれど……。」

私、こういう喋り方の人だから。あなたに口をはさむ事を許せなかったし、止まる事が出来なかつたのよ。この口が全て悪いんだわ。

本当に私の口って罪な口ね……。  
人を苛立たせる事も出来るし、誘惑する事も出来る。ああ、私って罪な女。」

「ああ……。そうだな。君は、本当に苛立たせるという事実に関しては、認めようではないか。」

しかし、君が罪な女であるという事実はあまり認めたくは無いがね。だいたい、君が罪な女である事など、私には、関係がないのだよ。

関係があるのはだね、君が言ってしまった、第2章って所にだね・  
・。  
私からすると、それは序章であり、第1章では無い。さらに言わせ  
てもらおうと、私はそれを序章にするつもりも無いのだよ。それはた  
だの下準備なのだよ。

今から始まる物語……。それが、序章だ。そこは、間違えないで  
ほしいのだ。」

女は男の見せたこだわりを目をパチクリさせて、その後、アホらし  
いとばかりに盛大なため息を吐いた。

「相変わらずあんたって、こだわりが多いわね。だから、あんたは  
童貞なのよ。あ、違った。童貞じゃなかったわね。確か2000年  
前以上に童貞は卒業してたわね。ああ、これもまた違うわね。あ  
んた一回死んで復活しているから、復活してからは童貞だったわね。  
失敬失敬。まあ、とりあえず……。あんたは、そんなだから童  
貞なのよ!!! 言いたいのはそれだけ。」

女が話し始めてからも沈黙を守っていた隣の男は、女の繰り出す「  
童貞」発言が次々と出る度に、こらえきれずに、ククツと笑った。  
その一方、無駄なくらいに「童貞」呼ばわりされた男は、どうでも  
良いとばかりにその間、駒をいじっていた。

そして、女を冷酷な瞳でキッと睨み、見下すような表情を女に見せ  
つけた。

「言いたいのはそれだけかな？私がそんな事をした理由は君にも分  
かっているとはかり思っていたのだけだね……。とある女との童  
貞喪失の行為を帳消しにしたかったからなんだよ。そのために裏切  
り者を出したのだからね。それは、どうして起こってしまったのか  
……。知らない君ではあるまい??マリアよ。」

男のその言葉に、グッと息を詰まらせたマリアと呼ばれた女は、瞳  
をうるませるとワッと泣き出して、その場からスウッと姿を消した  
のだった。

マリアが大粒の涙を床に撒き散らし泣きながら消えてしまうのを見送ると、男は、フンと鼻を膨らませた。

「あの女狐め。話しているだけでイライラさせてくれるな。まあ、この私に対して、ここまでの影響力を持つ女もアレと母上くらいなのだろうがな……。そうは思わないかな？ユダ殿？」

男が、冷たさを感じさせる声で言うと、目の前に座っているユダと呼ばれる男に話をふった。

話をふられたユダは、クスクスと忍び笑いをもらした。

「そうですな。あの女は、あなたを唯一揺さぶれる女の一人でありましょうな。私は、あの女を会話するのは苦手ですな。あの女は魅力の塊だ。我慢出来るだけであって、あの女の前では我慢したくなるものですよ。」

そして、母上様ですか……。あのお方には、私は本当に頭が上がりませんよ。何とか言ってくれませんかね。あのお方に“あの事”を許してもらえるように……」

ユダが嘆願の声を上げてそう言うと、男は馬鹿にするように、また愉快そうにフッと笑う。

「何の事かな。ユダ殿？私には、言っている事の意味が皆目見当がつかないな。」

「何の事ですよ！？冗談は止めていただきたい！」

ユダは驚いた顔をした後、怒ったような顔になった。実は口元に蓄えられている口髭もピクピクと動いている。

「あのお方には、あなたしか口を出せませんよ！！！！父上様の方は、私には身分がお高い人すぎて頼む事も出来ない！！！！あなたにしか頼めないのです！！！！」

ああ……。あの方に、私は何回殺された事やら……。」

「殺された？それは、おかしいな。我が母上は人を殺せない者であるというのに。」



男が愉快そうにそう言うと、ユダにとってそれは、愉快な事ではないようで、体をブルッと震わせて、キツと男を睨みつけた。

「冗談じゃない!!!それよりも、あなたもあなたでしょう!!!!!!あの女には手も足も出ないでしょうが!!!!!!あなたが出せるのは口だけでありましょう!!!!!!」

あの方は、あなたの……!!!!!!」

ユダがそこまで言うと、突然彼は、しゃべるのをやめた。

男から漂う只ならぬ妖気を感じたからであった。

本来、この男からは漂ってはいけない物が漂っている事に、ユダは自分が話してしまいかけた事の事の重大さに恐怖し、自分を落着かせようと、ゴクリと唾をのみこんだ。

しかし、まだユダは気が収まらず、話を再開させた。自分の身の危険を顧みずに……。

「あれは、あなたにとって、とても恐ろしい者と思われませんが？キリスト教の神の子イエスの妻とも言われ、また娼婦と下げずまれた女……。マグダラのマリア……。あなたは、あれに手を出す事はおろか何をする事も出来ない。なぜなら、誓約を立てているからであろう!!!!!!」

男は、ユダの言った事を辛抱強く待つてから、フッと自嘲する笑みを浮かべると、妖気を自らの意思で納めると、自分を抑えるための事もあつてか、ユダの前にコップを出してお茶を注いだ。

「すまないユダ殿。私は、あの女にはどうにも揺さぶられてしまう……。あの女の話が出るだけで、私の何かが変わっていくのがわかるのだ。ユダ殿。汝は、知らないだろうが……。あの女は、私の秘密をすべて持っている。それだけの関係であったからな……。」「ほとんどすべてを話したユダは、彼の話の落ち着いて聞いていると、なぜだか笑みがこぼれた。

しかし、それと同時にこれからの事に恐ろしい事が待っているかもしれないという恐怖感を感じた。

「なるほどなるほど。大変ですな……。私には、見守る事しかで

きませんが……。まあ、頑張ってください……。」

男は、照れくさそうに頭をかくと、腕を上空に向けて、指をパチンと鳴らした。

そして、男は気が狂ったのように、この空間に響き渡るほどの大声で笑った。

ユダはいきなりの事に、よく分からず首をかしげた。

男は、ひとしきり笑い終わると言った。「いやいや、すまなかった。

」

「まさか、あの女が噂をしていたら、また来るとは思っていなかったのだ。本当に笑わせてくれおる。」

ユダはようやく、彼がなぜ笑ったのかを察した。

しかし、それもやはりユダには恐怖を感じるものであった。

「なるほど……。噂をしていたら、現れたのですな。マリア殿が。

……」

「ああ……。」

ユダはここまで話して、そして、男が頷くのを見て、ようやく自分が感じている恐怖の理由がわかった。

この男が、妖気を発するはずで無いのに、妖気を発した理由が、マリアという存在のせいである事を理解したからであった。

それは、この男がマリアと出会えば出会うほどに、いけない方向に進んでいってしまう事を示している。

これから始まる物語にも、大きな支障をきたしてしまう事が彼の目には明らかであった。

しかし、彼には男にそれを言う勇氣は無かった。

言ってしまったが最後、彼はさらにいけない方向に変わっていくと思えたからだだった。

ユダは、慎重に言葉を選びながら、話を変える事にした。

「そうですね。そして、あの女を結界で締め出したのですね。たった今。」

男は、ただただニヤニヤと笑いながら頷いた。

「締め出したという事は、ここに来てほしくはないという事ですな。つていう事は、そろそろ始まるのでしょ。物語が……。」

男は、その途端に顔を真面目な表情に戻すと、頷いた。

「もう始まる……。だから、もう行ってくれないかな？」

始まりは、一人で見たいのだ……。

全ての始まりの惨劇はな……。」

ユダは、彼の考えている事を理解すると、素直に頷くと、彼はその場から一瞬で姿を消した。

男は、この暗い空間にポツンと一人になると、フッとまた自嘲気味に笑った。

そして、また指をパチンと鳴らした。

すると、彼の前に画面が現れ、何処か森に囲まれた村の映像が現れた。

地球の何処かと思われるが、それは地図上の何処にも存在する事自体がありえない物であった。

男は、チェス機の一番端の黒の部分を押すと、そこからテレビのリモコンのようなものが現れた。

「さてと、そろそろ始めようか……。この物語で、私の運命を左右するような、とても大事なものが産まれる。そして、同時に邪魔な者も生まれるが……。」

そう言つて、男は忌々しそうに顔をゆがませた。

男は、リモコンを画像に向けて掲げて、ボタンを押すと、映像が今度はその村をさらにズームして、村の中の一つの家屋が現れた。

その家屋の部屋の中で寝ている少年を見て、男は憎々しげにその少年を見つめた。

そして、少年を見ながら、「灼碧の瞳を持つ……。救世主 メシアが……。」とポツリと呟いた。

そして、映像はさらにズームされて、その寝ている少年の寝顔がアップで映し出された。

R e d  
B l u e  
灼碧の瞳？  
瞳・覚醒。  
始動。

第一部 第一話 とある空間にて？（後書き）

今回は、主人公は出ませんが、次の更新から出ますので、読んでくださった方はお楽しみにしてください）ー、ー、ー（キリッ

## 第一部 第二話 最初の惨劇。(前書き)

この小説は正直、あまりにも伏線がたくさんあります(；・・・)。

1ページに1個は絶対にあるんで、こう言つてはアレですが。

この作品、軽く考えただけで番外編も含めると30冊超える構想があります(；・・・)。

我ながら こんなによく考えたものだ(；・・・)。

ちなみに、この作品。

魔法のアイランドで書いていた時は、最初はホラーのつもりで書いたので

ファンタジーな部分は、一切出てこなかったので……。

今回からは、冒頭だけでも出そうと

この第2部を 当初の冒頭部分と混ぜて書かせていただいております。

少しでも変だと感じた所があれば、教えてほしいと思います(；・・・)。

## 第一部 第二話 最初の惨劇。

自分の部屋のベットのうえで、すやすや眠っていた神鳴司は、夢の中で幸せでムフフな人生を送っていたのだが、それが突然、2つの大きな赤い目がコチラを覗き込んでいる夢に変わった。

その目に畏怖を感じた司は、今立っている場所から逃げるために手あたり次第に逃げ回るのだが、何処に行っても、その目は自分を覗き込むのだった。

「何なんだよ！！お前は！！！」

司は、勇気を奮い立たせてその目に言ってみるのだが、その目は、あくまで目であって人と言う訳では無い。

勿論の事、口は無いので、司の問いに答える事は無かった。

「くそやろっつ！！！！！」

司は、眼に対してそう言い捨てると、再び駆け出した。

すると、先ほどまでは目だけがこちらを覗き込んでいる夢であったのが、突然変わり、真っ白な銀世界に移り、その中心に椅子がありそこに、一人の女性が腰かける夢に変わった。

女性を見て司は、目を見張った。

それと同時に、嬉しさによる興奮で心臓が早鐘を打った。

女性は、真っ黒な艶のある長い黒髪に、真っ白なワンピースを着てその上に真っ黒なカーディガンを羽織っており、その姿は何ものにも変える事が出来ないくらいの美しさを見せつけていた。

その女性は、数年前に自分と弟と妹を残して、父親と共に死んだはずの司の母親であった。

母親は、司を見て微笑むと、彼を手招きした。

「おいで。私の大切な子……。」

司は、母親の言葉に我を忘れて駆け寄り、椅子に座る母親を思い切り抱きしめた。

「母さん！！！！会いたかった！！！！！」

司がそう言つと、母親は優しい瞳を潤ませてにこやかに微笑んだ。だが司には分かつたのだが、母親の瞳には苦悩と悲しみの感情も宿っていたのだつた。

その表情に司は、わずかな違和感を感じ取り、司は夢の存在である母親にその表情の理由を聞いた。

「母さんどうして、そんな悲しそうなんだ？母さんは俺の夢なんだから？夢なら、どうして俺のなつていて欲しい表情じゃ無いんだ？？」

母親は、司の頭に手を置いて撫でると、司は嫌がったが、母親はそれでもなお止めようとしなかつたので、司はしょうがなくされるがままに頭をなでられた。

そして、母親になでられ続けていると、どんどん不思議と先ほど、目に追いかけられていた焦燥感も薄れていき、安らぎと幸福感が増していった。

その気持ち司の心を満たすと、母親は彼の頭から手を放して、何かを覚悟したような表情に変わった。

その真剣な表情に、司は圧倒されて、咽喉をゴクリと鳴らした。

「司。あなたに言わないといけない事があるわ。私は数年前に死んだ。それは分かつているわね？」

「知ってるさ。当たり前だろ。それに、母さんだけじゃなくて、父さんもあの時に死んだ。二人がいなくなつたかた俺は！！！！！」

司がそこまで言つと、母親は彼の口に人差し指をソッと押し当てた。それは、小さい頃から母親が司にする黙つてお話を聞きなさいという合図であつた。

「分かつているわ。あなたが今後、死んでしまう事によつて、弟と妹の面倒を見ないといけないなくなつてしまうのよね。分かつているわ。でも、私たちには時間が無いの。あなたのあの夢の現況から、あなたをここに連れてくるので限界なのよ。だから、これだけは言わせて頂戴。この村で惨劇が起こるわ。様々な陰謀があなた達やその周りを襲う。だから、母さんが言つたこの言葉を覚えて



いて。」

母親はそこまで言うと、司の頬をいとおしげになでた。

「あなたを信じてる。そして、生きなさい。あなたを必要とする人達のために。」

司は、さっきの母親の仕種のために言いたい事を言わないで、何か釈然としない所が多々感じたのだが、とりあえず、その言葉を胸に秘めて頷いた。

母親は、司が頷いた事に満足したのか、彼女のいた場所自体と共に真っ白な羽に姿を変えて消えた。

「母さんーーーーー!!!!!!」

司は、大きな声で叫び、母親の手を握ろうとしたが、その手は羽となり消えた。

それと共に、司は夢から覚めた。

慌てて回りを見渡すと、ただただ自分の部屋の家具が昨日の夜と何の変哲も無く、存在しているだけであった。

大きいため息を吐くと、司は窓の外を見つめた。

小さい頃の思い出を思い出しながら、夢の母親を思い浮かべた司であったが、母親の姿が彼には、ただの夢だとは思えなかった。

なぜなら母親は、もう彼の中では死んでいるし、実際問題、死んでいるのにも関わらず、母親はまるで、自分が“これから先の未来”で死ぬと言っているように感じた。

彼の母親は、不思議な力を持っており、その力で未来の自分の夢に母親はやって来たのだと、彼は感じ取っていた。

そこまでの結論に彼は至ったが、その瞬間、眠くなかったのが突然眠くなり、再びベットに倒れこんでしまった。

そこには、何か大きな力が働いているのを司は知る由は無かった。

夢の中で司は、遙か上空から自分が住んでいる家だけでなく、家のある村の全てを見つめた。

彼はこの光景を見て、変な間隔を感じた。

体が、ふわふわと浮かぶ間隔、それだけでなく、彼はこの村の上空から見た光景を見た事は無かった。

だが彼の目には、その光景が浮かんでいた。

これが意味する事は、自分が幽体離脱をしたと言う事なのかもしれない。

初めての経験に司は、戸惑いを感じた。

自分を落ち着かせようと、彼は村を見つめた。

司の住む村の名前は、大和村と言い、人口は千人と少なく、その人口のわりには広大な土地を有していた。

この村では、全ての事がこの村でまかわれるので、外部から来る人など今まで一度もおらず、村の誰もがこの事実には気づいていなかったが、司には気づいていた。

この村は、隔離されている。

こちらから、町に行く事は無いし、向こう側からこちらに来る事も無い。

その状況に司は、激しい違和感を感じるのだが、誰もそれには気づかない。

唯一気づいているのは、弟と妹であるが、その二人も異常事態とは思っていないかった。

この村のこの状況が、司達をいつか大変な目に合わせると思っていたが、それを口に出す事を彼はしなかった。

彼が思案していると、ふと村の入り口も向こう側から、車が何台かやって来るのが見えた。

その車は、村に入り、村の土地の真ん中辺りの真っ黒な屋根の家の中に入っていた。

司は驚いた。

この村に、村が出来てから500年以上“誰も入って来る事の無か

った”村に、誰かがやって来たのを知った司は、驚きを隠せなかつた。

司は、その家に少し近づき、車から誰かが降りるのを見た。

その車から降りたのは、二人の男女と自分と同じくらいの年齢の少年が車から出てきた。

女を見て司は驚いた。

女は、母親にうり二つの顔をしていたのだ。

強いて言うならば、目元が少し違っていて、母親の目は優しげな瞳をしているが、この女の目は冷酷な光を湛えていた。

その女が、何かに気付いたのかバツと振り返った。

そして、その視線はどんと上に向かっていき、ついには、司に視線を止めた。

女は、司を見てニタリと気味の悪い笑みを浮かべた。

司は、その笑みにゾツとしてその場を急いで離れた。

それと同時に、誰かが司を呼ぶ声が聞こえて、司は一気に家の自分の部屋の中のベットの上で倒れこんでいる自分の体の中に吸い込まれていった。

7月10日。午前8時20分。

「司！？司！！！！早く起きて！！！！もうすぐで高校始まるよ！！！！起きろ！！！！」

司にとっては朝早いと感じる時間に、自分を揺さぶり起こしてくる少女の声で司は幽体離脱から戻り、目を覚ました。

自分の事をやかましい大声で起こしてくる少女を司は、ボーッと寝ぼけた眼で見つめた。

身長は156cm、体重42kg。パツチリした瞳で、ふっくらし

た唇と持ち合わせた司が通う大和高校で1番の恋人にしたい人NO  
1の少女で、司の口やかましい幼馴染である。

名前は、睦月遥と言い、司と同じの16歳である。

司は、頭がハッキリしてきたので、言おうと思っていた文句を言っ  
てみた。

「うるせえよ。耳元で騒ぐな馬鹿。」

「早くしないと学校始まるよ。っていうか、@15分で学校始まる  
からね。」

遥は、司の文句を無視すると、困った様に苦笑しながら、司の勉強  
机の上にある時計を見やつてから、俺の今のヤバサを端的に教えて  
くれた。

「はああ!?!」

俺は驚いて、大声で叫んでベットから転がり落ちた。

勿論の事だが、すごく痛い、というよりも、死ぬほど痛かった。

こういうのはゲスな言い方なのは分かっているのだが、言わせてほ  
しい。

ケツがいてえ!!!!!!

「何やってんの!?馬鹿じゃないの!?!弟君、こまってたよ!何  
回おこしても起きないって言ってた!顔も泣きそうになってたよ。  
死んじゃったんじゃないかって!!!!」

遥は、怒った風に腕を組んで、弟が俺が幽体離脱しちゃったせいで、  
大変な事になってしまっていた事をご丁寧にも教えてくれた。

あの野郎、よりもよって一番チクられたくない奴にチクリやがっ  
て。。。

司は、床に尻餅をついたせいでイライラしていたのも手伝って、少  
し怒った風に少しムスツとしながら、いわゆる逆切れ状態で怒鳴っ  
た。

「うるせえ、ほっとけよ!!!!!!」

「そんな事より、早く急いで!」

遥は、司の怒鳴り声なんか屁へもないように「そんな事」扱いして、

俺と同じ目線になるようにしゃがみこんで、俺の肩をブンブンとゆすって諭すように言った。

俺は、一応起きているから、ゆすっても無駄だと思うだぞ。馬鹿。そう思ったが、口に出さないでおいた。

また怒ってくるのが目に見えていたからだ。

「分かってるよ……。うるさいなあ……」

だが、司は遥がうざったく感じ、ほんの少しだけ気に入らなかつたので、ちよつとした不平だけは言った。

「うるさいって何よお……」

「もう、司何かしらしない！私、先に行ってるから！」

遥は、頬をプーっと膨らまして不貞腐れると、司をベットにバンッと押すと、勢いよく彼の部屋を出て行った。

「あ！待て！由香里！」

司は、しまったと思い、慌てて彼女を呼び止めたが、そんなのは怒っていたのか、全く聞こえていなかったらしく、扉がバタンと音を立てて閉まる音が聞こえただけだった。

あー。あの野郎。俺を放って行きやがった。てか、あいつの沸点低すぎて分からねえ！めんどくさいが、後が怖いし、高校にいたら謝っとくか……。それより、早く学校行かないとやばいな……。司は、めんどくさそうに頭をかきながら、時計を見ると、急いで制服に着替えて、食卓に弟が置いてくれたのであるう食パンを手にとって口に啜えた。

「行ってきまゝす。」

誰もいない家にそう言いながら司は、勢いよく家を飛び出し、高校へと向かう道を思いっきり全速力で走った。

遥が、司の家を出て行ってから10分経っていた。

学校まで、走っても8分はかかる事から考えても、確実に高校の授業が始まる時間に合う可能性はあるが、朝礼には間に合わない事は確実であり、けれども、司は思いのたけを足に込めて走った。その間にも、司は、遥にいつ謝るかの目算をしていた。

遙とはクラスこそは同じである（一クラスしか無いので当たり前である）が、自分が遅刻であるのは確実、しかも、宿題を絶望的なくらいにしておらず、休憩時間中に宿題を片付けないと古典的ではあるが、廊下でバケツを持って立たされないといけない事に見舞われるので、帰るに謝ろうと決意した。

そんな決意をした折、丁度、高校についたのであった。

司は、休憩とばかりに高校を見上げた。

一階建の木造校舎、しかし土地は広大で東京ドームの半分くらい広い広さを誇っていた。

その校舎の下駄箱に入っただけの所に、教室はあつたのでイソイソとしゃがみながら入ってみると、司に向かって真っ白なチョークが粉を周りにまき散らしながら飛んできた。

それが、司の首にクリーンヒットし、司の首の横の部分に激痛が走った。

「痛っ！！！！」

痛みで、首を手で押さえると、先生の怒鳴り声が教室中に響き渡った。

「こらっ！神鳴！お前はそこで立つとけ！」

司は、「はいっ！！！」と言って立ち上がり、教室の後ろに並んでいるロッカーの前に立った。

今、司を怒鳴りつけ、チョークをなげつけた人物は、彼の担任の名前は、松野遊星という名前の日本史の教師であった。

「はいはい。分かりました！！！」

何となく俺はむしゃくしゃしていたので、もう一回、二回言ってみた。

彼が、二回返事した途端に、いつの間には松野がやって来て、司の頭を拳骨でどついた。

「はいは、一回で十分だ！！！」

「っ！！！」

痛え……。この先生本当に加減って物を知らねえよなあ！！！！は

いをもつかい言わなかつたら良かった……。

その後、数分経ってから、朝礼が終わって司は、ため息と共に席についた。

そこに、司の肩に張り手を食らわした奴がいた。

「おい！神鳴！お前何で遅刻したんだ！？」

彼に、とてつもない破壊力をもたらす張り手をくらわした声の主を司は、振り返った。

そいつの名前は、結城一樹と言う名前で、司の親友であった。

「あゝ？寝坊だよ。寝坊……。」

司は、適当にだが、本当の事を答えた。

一樹はギャハハと、腹を抱えて、下品な笑い声を上げながら言った。

「お前アホだろ！その歳で寝坊かよゝ！」

司は、ムツとなって、侵害だとばかりに言い返した。

「うるさい。お前に言われたくねえよ。去年、毎日寝坊してたヤツに言われたくねえよ！」

事実、彼は毎日寝坊で遅刻していた。

本当の事を言われて、自分にそんな事を言う権利がなくなった事に気づくと、一樹は顔を真っ赤にした。

「う、うるさい！ほっとけ！」

一樹は、その後も先生が来るまでペラペラと喋っていたが、司は、遙のいる方を見ていた。

遙は、司を見ていたように自分が自分を見ていた事に気づくと、頬を少し赤く染めて怒ったように、ソップを向けた。

あちゃあ……。これは、本当に謝らないとヤバイかもしれない……。

そうこうしてるうちに、予想通りに謝る時間は無く、なあなあと時間は過ぎていき、学校は終わった。

そして、帰りに遙を見つけると、司は彼女を捕まえると、謝った。  
「おお〜い！遙！朝はごめんな！」

遙は、まだ怒ってるようで、プイと顔を司から背けて腕を組んで言った。

「ふん！司のバカ！」

「怒るなって！謝ってるんだからよ！」

彼女はまた怒っているようで、まだこっちを見ようとはしてくれなかった。

しかし、少しだけ気を許したのか、こっちをゆっくり振り向いた。

「分かったわよ。許してあげる！」

「本当か！？良かったあ……」

遙は、腕時計を見ると、慌てて笑顔を作った。

「あ、もうこんな時間じゃない！！それじゃあ、私急いでるから！」

また明日ね！司！」

「おう！また明日な！」

遙はそう言って、手を振って、急いで何処かへ走って行った。

司は、ホッと安堵して、彼女を見送ると、家へと向かった。

この時の司は、気づいていなかった。

昨日の幽体離脱で見たものが、全ての始まりであった事に……。

遙は、司と別れた後に、ガッツポーズをした。

良かったあ……。

やっと司と仲直り出来た事に、遙はホッと胸をなでおろした。

実は、司に対しておこってしまった事に、少しながら罪恶感を感じた遙であったが、自分で謝る事は違うと思えたので、司が来るのを、ずっと待っていたのだった。

帰り際にやっと謝ってきた人には、少し腹が立ったが、謝ってくれて昨日から計画していた事を実行出来る事にホっとした。



「明日は、私が司と初めて会った記念日！！明日、告白する……んだもん……」

遙は、ウンウンと頷いて決心すると、遙か上空を見上げた。

そこには、自分の決心に似合わないカラスが飛び交っていたが、彼女は、気を取り直して両手で拳を握りしめて決意の言葉を言った。

「よし、その記念のプレゼントを作るぞっ！熊のヌイグルミ……。そういう柄じゃ無いのわかってるけど、少しは、喜んでくれるかな？」

彼女は、そう言うてはにかむと、家へと駆けだした。

その時、そんな遙を見て、独り言をニヤニヤしながら、呟いている者がいた。

風貌は、真っ青な色で不健康そうな表情の顔の遙と同じくらいの年齢の少年で、司と同じ制服を着ていた。

少年は、もの欲しそうな目で遙を見た。

「ふうくん。あの子、おいしそう……。よしっ、あの子から食べてやろうっ。」

少年はそう言うと、上空へと跳躍して、遙の走っていく先に飛び降りた。その距離、まさに200mである。

「だ、誰ですかっ。あなたはっ!？」

遙は、自分の前に突然、空から降って現れた少年に驚いて、恐怖と驚嘆の声を上げた。

少年は、さっきよりも下卑た微笑みを湛えると、遙にジトリジトリと近づいた。

「まあね、そんなのどうでも良い事だよ。僕の名前なんて、君は知る必要は無いんだよ。君は、どうせ。僕に食べられるんだから!!！アハハッ」

遙は、その少年の言った言葉に拭うことの出来ない、体中の毛を逆立たせるような恐怖を感じ、叫びながら少年のいる方向と逆の方へ逃げ出した。

「いやああああああああああああああああ」

遥は少年は、さらに下卑た笑いながら、彼女を愉快そうな表情を浮かべて、あえて同じくらいの速度で追いかけて行った。

「アハハツ。逃げてても無駄だよ？」

そんな少年の遥を追い詰める声は、彼女には届いていなかった。

とりあえず、部屋に入れば自分は安全なんだと思いこんで、必至に無我夢中に自分の家へと走った。

そして、由香里が家の前についた・・・丁度その時。

遥を追っていた少年は、ニコやかに微笑んでいたが、その微笑みが突然消え、つまらないという風な表情に変わり、とてつもなく眠そうな欠伸をすると、遥の目の前に瞬間移動した。

「もう、飽きたよ。でも、丁度もうゴールだしさ。じゃ、ちょっと眠ってもらうねえっ」

少年はそう言うのと、遥の懐に一瞬で移動し、遥の、みぞおちをちよつとした力で殴って気絶させた・・・。

「うつ・・・。だ、誰か助け・・・」

遥は、あまり響かない声にならない呻き声を上げた後、助けを呼びながら、その途中で、その場で倒れ込んだ。

しかし、この村は、1000人の人口なのに広いのが、徒となつてしまい、彼女と少年の光景を見る者は誰もいなかった・・・。

少年は、遥を肩に担ぐと、フウっと一息ついて、彼が今いる所の一番近くに目をやった。

「さてと。作業完了。とりあえず。この子を山小屋へ連れてこっ」  
遥は、深い霧の立ち込める山の中へと、へズルズルその少年に、引きずりこまれていった。

翌日となり、司は学校へと、何も知らないままに行った。

彼が、自分の席につくと同時に、朝礼の始まるチャイムが鳴った。

先生は、ガラッと教室の扉を開けて、重々しい空気を垂れ流しながら

ら入って来た。

そして、先生は鎮痛な面持ちで言いにくそうに、重そうな口を開いて語り始めた。

「おはよう・・・え、今日はお前らに報告がある。あ、睦月が・・・。行方不明になった。」

この先生の言葉でクラス中が騒然となった。

遙は、クラスの人気者であるだけでなく、この高校の生徒会長もやっているからな・・・。

その分、シヨックも多い上に、皆、びっくりしているのだろう。

この村では、家出やそういう関係の事は“ありえない”事になっており、自然と遙は“失踪”した事となっている。

家出でなく、失踪という事実がさらにこの騒然とした空気を助長させていた・・・。

この時、司は以外と何故か落ち着いていた。

遙とは幼馴染である彼は、他の者よりもシヨックであるべきであるのだろうか、なぜだろうか？あんまりシヨックを感じなかった。

この時、彼は薄々感じていたのだ。彼女が、死んでしまう事を・・・。

そして、その先で・・・。。。。。。

「それって、いつからですか？」

誰かが、その騒然とした空気を破って、先生に聞いた。

司は、その人物を探したが、見つける事は出来なかった。

先生は、悲しそうに、そして悔しそうな表情で、その問いに答えた。

「昨日、学校を出てから家に帰ってないらしい。」

「そうですか。」

誰かは分からないが、そう答えると、先生は気を落ち着かせて、全員を見まわして全員を勇気づけるように言った。

「と言う訳だから、今から全員で、睦月を探しに行くぞ！！！！」  
全員は、大声で返事した。

「はい！！！！」

全員で、勢いよく遙を授業もそっちのけで探しに行き、さらには、街の人達までも総動員で探した。

夜中の1時まで探したのだが、それなのに遙が見つかる事は無かった……。

もしかしたら、誘拐ではないだろうか？という話も上がったが、ただし、身代金の要求もない。

司は、他の人と違い、何か恐ろしい何かに巻き込まれたせいじゃないのかと考え始めていた。

そう思うのは、どうかとも普通は思うものだろうが、この村は普通でない事が多い。

神隠しにあつたのかもかもしれないと、司は無責任に考えていた。

翌日の7月12日。

この暑い夏ではありえない。何でこんな事があるんだ……。

司は、道端でボーっと立ちながら辺りをキョロキョロと見回した。

やっぱり、これは、見間違いないな……。

そう思いながら、再び周りをキョロキョロと見まわした。傍から見ていると、とても挙動不審な状態である。

しかし、司にはそう思われている事など考える術も無かった。

なぜなら司の周りには、濃霧が立ち込めていたからだだった。

しかも、それだけでなく、村中に濃霧が立ち込めていた。

何処を歩いても濃霧ばかりであった。

それゆえに、司には、周りにもし、人がいても気づく術が無いのだ。

それに付け加え、この司の周りに立ち込める濃霧は周りの人には見えないのだ。

他のおばさん連中が立ち話してる所を司は聞いていたが、明らかに霧があるというのに、「今日は晴天ですねえ。」と言う人ばかりであった。

村の人間にとって、濃霧が村中に立ち込めるといふ事は、一大事件である。

事件のないこの村で、こんな一大スクープを、わざわざ天気が良いと言つて、現実逃避する訳が無かつた。

この村は、なぜか司にしか見えないのだ。

司には、何かが好からぬ事が起こる予感がしていた。

考えてみると、遥が消えてからおかしな事が次々と起こり始めていた。

その時、山小屋の中で遥は、すやすやと気持良さそうに眠っていた。そして、気だるそうにムクッと起き上がると、当たりを見回した。

「うう〜ん、ここは・・・？」

遥は、寝ぼけた様子でそう言つと、目の前に誰かの足元が見えた。

「ん？誰か、いるのかな？まあ、それよりも、まだ眠いし寝よう。

おやすみなさい。」

そう言つて、遥は起きてすぐであるのに、何の危機感も感じずに、普通に二度寝をし始めた。

そこに少年が、完全に姿を表して、いつもの下卑た笑みを浮かべた。

「ウフフフ。君が最初のご馳走だよ。おいしそうだね。いただきまあ〜す！」

少年が遥の胸の辺りに手を突っ込むと、そこから血しぶきが、勢いよく噴水のように噴き出し始めた。

そして、少年は手に臓器も何も持っていなかつた。

手に持っていたのは、不思議な光を宿す彼女の地でベトトリと濡れた何かであつた。

それは、彼女の魂であり、少年は彼女の魂を食べようとしているの  
だった。

少年の正体は、悪魔であった……。

この悪魔によって惨劇の幕が開く。

数日後、遙は彼女の家の前に帰って来た。

冷たく、硬く、白い姿になってしまっていた。

そう彼女は、物言わない屍になってしまっていた。

そして、霧はもっと深くなってゆくのだった……。

第一部 第二話 最初の惨劇。(後書き)

さて そんな訳で始まりました(;・・・)

この話は、結構ハードです。最初は、惨劇というだけあって死人たつぷりです。

その死人も結構、重要ですし、今の所 伏線がすごい量入っています。

今後の展開で、伏線出したり回収したりの押収ですが、最後まで頑張って書いていきたいですね(;・・・)

ちなみに次回の更新予定は 土曜日くらいです!!

第一部 第三話 来訪者。(前書き)

この回で、この話の主人公のお相手のボスが登場します。

この物語はシリーズものなので、今書いている章だけのキャラでいう訳でなく、今後もずっと出てくる人なので、ちゃんと見捨てないでね(；・・)

ちなみに、今回は まだ少しホラーテイストなので、死人です(；・・)

よろしく( 〰 )



## 第一部 第三話 来訪者。

7月13日 -。

この村に、とある家族が引つ越して来る。

彼らは、とても人間と呼べる存在では無く、魔物のように思えた。見た目こそは、人間ではあるが。

俺には、悪魔のように思えた。

彼らの正体を俺はすぐにわかる事になる。

濃霧を表した者達 -。

悪魔の王であつたのだと・・・。

大和村の丁度真ん中に位置する辺りの所に、村の中で十・十一を争う中途半端の大きさを誇る一軒家が存在した。その家には、夏野柚人・瑠衣・千恵の3人が、細々と慎ましく暮らしていた。

普通の中の普通の柚人と瑠衣は、ほのぼのとした老後生活を送っていた。その二人の義理の娘である美香は、老後生活をして二人の手伝いをしていて、その姿は周りの村人達には関心の的となつて

いる。  
なぜなら、先ほど義理の娘と言つた通り、美香は二人の本当の娘ではなく、二人の息子の嫁である。その息子であり夫である男は、死んでおり、その妻である美香は夫に頼まれた訳でも無いのに、二人の生活を手伝っているからである。

そして、この家族は標的にされるのだ。今からやって来る者達の・・・。

「お母さん、お父さん」。御飯出来たわよ！」

美香は、家から車で10分くらいの所にある夏目家の所有している畑に原付に乗ってやって来て、少しばかり畑の敷地が広。その奥の方で農作業をしている二人を声が届くように大きな声で呼んだ。その声に気づいた柚人と瑠衣の夫婦は、お互い同時に振り向き返事をした。

その返事は、感謝の心で溢れており、瑠衣の目からは一筋の涙が流れていた。

「はい！ありがとうございます。美香さん。死んだ息子の代わりに、こんな事をしてくれて……。もしかすると、私たちは他人になる事さえできたのに……。」

「いえいえ、そんな悲しい事言わないでくださいな。私は好きでやつてるんです。死んだ旦那の分。生きてくださいね！」

美香は、滅相もないと首を横に振った。そして、キリッとした力強い真剣な顔になると、また力強い声で二人の夫婦をなくさめた。

「ありがとうね……。美香さん……。」  
そんな美香の優しさに、今度は瑠衣だけでなく柚人までもが涙ぐんだ。

「死んだ息子もきつと喜んでるだろうねえ……。」

「ああ。そうだろうよ……。」

青空を仰ぎながら瑠衣が言うと、柚人もそれに応じた。

美香も一緒になって青空を見上げた。

「あの人は、私たちを見守ってくれているかしら。ねえ、あなた？」  
彼女が死んだ夫に対して、届く事のない願いと質問をなげかけると、突然綺麗なソプラノ歌手を思わせる音色の含んだ女の人の声が聞こえた。

「あの……。こんにちわ。」

美香を最初に、後の二人もその声のする方へ目をやると、そこには声の美しさに負けず劣らずの美しい女の人が立っていた。ハリウッド女優を思わせるような容姿に、背丈をしていた。服装は、まるで喪に服しているかのような真っ黒なワンピースを着ていた。しかし、

その服装であつても、その女性の美しさは陰りを見せる事はなく、逆に何処か謎めいた輝きをたたえていた。

その美しい女の人を3人は知らなかった。だからこそ、驚いてしまった。

この村では、村人の知らない人間がいる事なので赤ん坊以外には、

“ありえない”事なのである。

だから、美香はその美しい女性に憧れと嫉妬のような感情を感じ不審に思いながらも、それを顔には出さずに女の方へ歩いていき優しそうな声音を出して声をかけた。

「こんにちわ〜。どうかありませんでしたか？初めて見るお方みたいですよけれど。」

女の人は、美香に声をかけられると、まるで、ホッと安堵したかのような表情を見せた。そして、美香の手を取って優しげに美しい顔で微笑み、ソプラノの歌手を思わせる声を優しい声音で出した。

「あの、突然すいません。私は、黒樹という者です。ちょっと、お願いがあるのですが。」

その声を聞いた瞬間に、美香とその後ろで怪しいと言う風に黒樹の姓を名乗る女を見ていた夫婦は、急に人が変わったかのように彼女の元にかけてよつて微笑んで、一斉に「お願いとは？」と聞いた。

その返事を待つてましたとばかりに、目を輝かせて女は微笑むと3人の目を一人ずつ順番に見て、そして大きな息を肺にため込んでから、今度はゾットとするような恐怖を感じさせる声音で3人に言った。しかし、3人に何があつたのか、その声に何の反応も示すことは無かった。

「私の言う事を聞きなさい。」

女がただ一言、そう言った途端、先ほどまではただ人が変わったかのようになつただけの3人であつたが、今度は真っ黒であつた瞳が青色で濁つた黒い瞳に変わった。

そして、まるで無理に言わされているかのように、擦れた声で言った。

「な、何を……。す、ればい、いでしょ、うか……。？ご主人、様」

その言葉を聞いた女は、周囲にこだまするくらい大きな声で、聞いた者がこの村で誰か一人の人間でも聞いていたのならば、誰もが気絶するのではと言うつくらいに恐ろしい笑い声を鳴り響かせた。

翌日の7月14日……。

「夏野さ〜ん。お野菜ちよつといただけませんか〜」

そう言つて夏野家の玄関に一人の男が、ガラガラと扉を開けて、靴をはいたまま家上がった。

その男の名前を、榛名一馬と言い、夏野家の家の隣に住んでいた。しかし、隣と言つても車で5分から10分ほどかかるほどの遠い距離に住んでいるお隣であった。

一馬は、我が物顔で勝手知つたると言うような感じで夏野家のリビングの扉を開けた。しかし、その中の光景を見てしまった一馬はその中へと入る事が出来なかった。

なんと、リビングの机に一体、リビングのソファに一体、リビングのテレビの前に一体。それぞれ死体が転がっていたのだ。その死体の周りには、たくさんの血が流れていたのだから血で出来た池があった。そして、その血の池の存在こそが、この死体が最近死んだばかりである事が分かる物であった。しかし、その死体は誰の顔なのか判別出来ないくらいに“腐っていた”。顔の目の辺りからは、蛆虫が湧き出ており、口からは大量の蠅が入ったり出たりを繰り返していた。そして極めつけは、胸のあたりがごっそりと陥没しており、そこにあるはずの臓器が一式飛び出ており、素人でも分かる心臓は、どの死体には存在しておらず、ごっそりと消えてしまっていた。ただ、これだけの状況の中でひとつだけ異質な死体があった。それは、美香の死体である。美香の死体は“腐っていない”のだ。そして、胸の方も陥没はしておらず、何の損傷も無かったのだった。

この2つの死体の状況を考えると、逆にこちらの死体の方が異質に見えた。

「な、何だこれは！？それに、夏野さん・・・なのか？これは・・・」

一馬はその死体のあまりにも損壊具合に、2つの死体が夏野家の人間たちであるかさえ判別する事が出来なかった。美香の死体を見て、一馬はやつとこの2つの死体が他の夏野家の夫婦の死体である事を理解した。

しばらくの間、この3つの死体をジッと見ていた一馬は、とりあえず、警察を呼ばなくていけない事に気づいて、ポケットから震える手で携帯をだし、そのダイヤルを押しながら、110番し警察に電話した。

一馬が事細かに電話の向こうの警察に説明した事もあったのだろうか、警察の一人の男が、本来ならばここまで1時間かかる距離を40分で慌てたような表情を見せながらやって来た。

そして警察の男は、その光景を見て頷くと、一馬の方を向いて儀礼的に事情聴取をした。

「あなたが一番最初に彼らの死体を見つけたんですよね？そして、うちの警察に電話をしてくれたのもあなたですよね？榛名一馬さんですよ？」

警察が榛名一馬に聞くと、榛名一馬は目をきよどらせながらいかにも怪しそうに見える感じで頷いた。

「はい。野菜を頂こうと来て、家にながらせてもらっただけです。もしたら、こんな風に・・・。それで、家の中の人達が、美香さん以外、皆こう・・・。ひどく腐っていて・・・。」

警察は、死体を一瞥すると微笑を浮かべながら、警察手帳にメモをし始めた。

「なるほど、そうですか。人影を見たりしましたか？」

一馬は顎に手を当てて、今日一日の行動を思い出そうとした。そして、その後、否定するように首を振った。

「いえ……。そういうのは見ませんでした。あ、それより死因は……？って言っても……」

警察はお手上げと言った感じにため息を吐くと、再び死体を3つ順番に一瞥した。

「さすがにわからないですよ。こんなのありえませんか。ある意味。とりあえず、検屍をしてくれる医者を呼んでいるので、それを待つばかりですね。申し訳ない限りですが……」

榛名一馬は、寂しそうに悲しそうに俯いてボソッと呟いた。

「そうですね、犯人見つければいいですね……。それでは……」

「

榛名一馬はトボトボと歩いて帰って行った。

その後ろ姿は、何処か悲しげにも見えた。

その後、一馬が去っていくのを見ながら、警察の男は再び夏野家の家の中に入り、3つの死体を無機質な表情で見つめた。

「犯人が見つければ……。ねえ……」

「ん？どうかしたか。正仁？」

警察の男は、感情の籠っていない声を大根役者のように呟くと、後ろからめんどろそうな声色の声が出た。

正仁と呼ばれた警察の男が振り返ると、そこにいたのは青いカッターシャツに茶色いネクタイに黄土色のズボンという服装の上に、真っ白い白衣を着ている医者風な男がいた。

その顔は、端正な顔立ちをしているのだが、30代後半の顔である上にたくさんの短い無精髭を伸ばしていた。医者ではあるが、まるで世捨て人のように見えた。さらに、めんどろくさそうな表情をしているのが、さらにそのように見えるようになっていた。

「ああ、吉田先生か。ハロー」

「おい、先生はやめろ。それに、なんだその気のない返事は。」

正仁は吉田先生と呼ばれる男にそう言うと、男は髪の毛をかきむしった。

「なぜ？分かるだろう。俺たちの関係だ。察しろよ。」

「ああ俺ら。昔ながらのガチなんだろう？」

「ガチ？そんな言葉あったか？」

吉田はおどける様に言うと、正仁は不快感をあらわにした。

この二人は、昔ながらの幼馴染でもう一人の少女を入れて3人で「大和の3人衆」と呼ばれていた。

なぜなら、ある意味で「警察・医者・裁判官」と3つの重要な職業が揃っていたからだ。

正仁はため息を吐くと、彼の肩を叩いて、死体の方を一瞥した。

「ああ……。すまん……。それより、何だあれは？見たただけで何か分かるか？」

吉田は、その方向を見て顔を壮大にしかめたが、鼻をつまみながら死体の方に近づいた。

そして、彼が3つの死体を調べて1時間もの時間が経った後、死体の近くで座ったままの状態で正仁の方に顔を向けた。

正仁は、驚いて目を丸くさせた。予定では、2時間かかるはずだったからだ。

「もしかして、もう分かったのか？」

その正仁の質問に吉田は頷くと、唯一腐っていない美香の死体に視線を向けた。

「俺が検屍した限り、まず最初に美香さんだが、彼女だけ何故なのか腐ってない。しかも、外傷と言う物が存在ない。もしかしたら、二人を殺した後に自分も自然に死んだという可能性も考えられたのだが。」

そこまで言うと、こんどは2つの腐った死体を一瞥して、悲しげな表情を見せた。

「それはありえない。この血を見たが、多分二人から流れた物と見て間違いなし。この地の池の範囲などから察するに、ほとんど乾いてない事から死んだのはここ一日以内である事は確実。それに、詳しい事を調べないとわからないが、この胸の切り開かれた傷を見

て思うに、生きてままだよ。むごいとか言いようが無い。そして、そのまま心臓を抜いた。その証拠と言っているのか。天井のあたりにまで、血が飛び散っているぞ。」

そこまで吉田は言う、上の天井を指差した。

正仁は、嫌そうにため息を吐くと、天井を見た。

やはりそこには、彼の言った通りに、たくさんの血しぶきが飛んでいた。

吉田は、そこまで言うように指をパチンと鳴らすと、正仁の注意を再び自分に戻し、説明を再開した。

「それとだな。この蠅とかの成長具合から察するに死後10日以上は経っている。いや、もっとだな。まあ、普通ならば・・・だが、それはありえない。プロの俺から言わせると、この状況は“ありえない”としか言いようの無いものだ。以上。正直、心不全にすれば・・・って心臓ねえな。めんどくせえ。」

そう言うと、再び吉田は頭をガシガシとかいた。さっきは何も無かったが、今度は彼の頭からはフケがたくさん落ちた。

正仁は、そうかと呟くと、いつも二人の間でお決まりになっている質問をした。

「お前はどう思う？吉田・・・この事件の犯人、分かるか？」

「さあな・・・もしかしたら悪魔とか・・・かもなあ？」

吉田は分からないあまりに、冗談めかしてそう言った。

「本当に悪魔だったりしてなあ・・・。」

正仁はニヤリと笑い、吉田の冗談に冗談で返した。

吉田は、その返しに無言で頷くと、身をふるわせた。

「この事件は、次はいつ・・・始まるんだろうな。」

吉田がそう呟くと、正仁は首をかしげた。

「どういう事だ？これは連続事件なの・・・か？」

「そうだ。この前にあった遙ちゃん的事件。あれと美香さんの状況が一緒なんだよ。だから、これはまだ続く。そんな気がする。」

吉田がそう呟くと、正仁は冷や汗を流した。



そして、正仁はリビングのテレビを何故かジッと何かを問いかけるように見つめた。

そんな折、司の周りの霧がさらに一層濃くなっていったのだった。。。

「夏野家の死体……。普通ならありえないけど……。私は腐らせて……。娘の方はそのままにしておいた。今は私の考えた通りに視た通りに事が進んでいる。ここから先、不確定要素が出てこなければ良いのだけれども……。もし、出てしまつたら……。」  
女はそう不安げに呟いた。それは、司が夢で、彼を見つめた女。そして、彼女は夏目家の人間たちに変な事をした女でもあつた。

「ああ、そうだね。お前……。」

そんな彼女に、傍らで佇んでいたとある男は、深みのあるテノールの声で優しくなだめるようにそう答えた。

「あ、あなた……。大丈夫よね……？」

男は、さらに彼女を安心させるために女の頭を優しくなでて微笑んだ。

「ああ、心配いらないよ。きつと成功する……。それでなければ、ここまでやった意味がないよ。それに、あの方が手伝ってくれてくれるんだよ？」

「そ、そうよね……。大丈夫なのよね。」

男の優しさを感じた女はしかし、全くと言って良いほどに安らぎを感じない事は無かった。

ただ感じるのは、この先に何が起こるのがわからないという漠然とした不安だつた。

人間という物は、突然何をしだすか分からない。そんな生き物なのだから……。

7月18日

司は、遥の家へと続く道を、一樹と一緒に遥の葬式場へ向かって重い足をノロノロと動かしながら歩いた。

司は、遥の死体を思い出していた。遥の眠った顔は、とても顔白かった……。しかも、とても美しく神々しく感じてしまった。

遥が消えてた間、いつたいぜんたい何処にいたんだろうか……。あいつが見つかつたのは、大和村の中で唯一の川である「玉無川」だった……。その川の河原で、倒れている所を司の弟の望に見つかったのだった。

そして、そんな彼女を死体を調べた吉田さん曰く、検屍をした結果、自然死であるとか考えられないとされた。そう急性心不全と言っていた。死因不明の死体には、そういう病名をつけるときが多いらしい。

ただ確かなのは、川に入る前に死んでいる事が明らかになっていた。という事は、遥は死んだ後、誰かに川に捨てられた事になる。一体誰に川に捨てられたのだろうか???しかも、不審な点がもう一つあったらしい。なんと、傷ひとつ死体にはついていと云うのに、心臓がごっそりまるごと無くなっていたのだ。そんな事、そうしてもありえない事だった。

本当に訳が分からない。そんな事件であった……。そして、その後。

司は、どうやって遥が死ぬ事になったのか。それをとある者に教えられる事になるのだ。それは、この村に多大な災いと不穏をもたらしたのだった。

そんな事などまだ知らない司は、一樹と共に遥の葬儀の式場へ向かうのだった……。

翌日の7月19日。

司は、いつもなら一人で高校へ行くのだが、今日は何故だか気が変わった。一樹と一緒に学校に行った。

二人同時に教室に入ると、机と椅子が1つずつ無くなっていた。まるで、最初から遙の存在など無かったかのように。普通なら、その席の上に花瓶などを置いて、死者に手向ける物であると思っていた司は、その異様な光景に唖然となった。

そして、それと同時に、遙がいなくなっただ・・と、ここで初めてちゃんと気づく事が出来た気がした。実感する事が出来た。

そう思い始めると使命感が司の中で燃え上がり始めた。

もう、あいつは戻って来ない。けれど、遙のために絶対に誰があいつを川に捨てたのか、突き止めてやる・・・。司はそう決心した・・。

そして、その後。まるで遙の死など何も無かったように、いつも通りの楽しいなクラスの雰囲気です授業が始まっていた。そのあまりにもの、薄情と思える状況に司は、止める事のない激しい吐き気を感じた。

一樹でさえ、それに乗って楽しげに他の奴らと会話していたのだった。

そんな異質な学校の時間がダラダラと流れ、終わった瞬間に吐き気が頂点に達しかけていた司は、一樹の手をひつつかみ、急いで逃げるように学校から逃げだした。

そして、走っているとふと、胸がざわつくのを感じた彼は立ち止まった。

そのざわつきの原因を目で追うと、そこにはたくさんの石の破片が散っていた。

それを見て司は気づいた。この石の破片は、“地蔵”が壊された事によって出来た物なのだ。

「なあ。地蔵。なんで壊れてるんだ？　いったい誰が壊したんだ……？」

司は、震える手で地蔵を指さして一樹に言った。

「一樹は心底どうでも良さそうな顔をしてうなづいた。

「ああ、壊れてるな……。」

そんな彼の様子に司は、ふと違和感を感じたが、それも隣の方から聞こえる声でかき消された。

「ねえ、奥さん聞きました？　村中のお地蔵さんが壊れてるらしいですわよ。」

「そうらしいですわね。」

「一体誰の仕業でしょうね。」

「どーせ、五十嵐さん所の息子でしょうよ。」

「ですわね。いつも悪さしていますし。」

とてつもなくくだらない上にわざとらしい言葉の羅列が司の耳に流れてきた。そのあまりにもものわざとらしさには怒りを感じずにはいられないくらいだった。地蔵の方がどうでも良いように感じたが、この二人の会話にも、激しい違和感を感じた。それに、人のせいにしていると言うのもいただけでない。司の最も嫌いとしている所であった。

しかも、彼には分っていた。五十嵐はやっていない。なぜなのかは分からないのだが、ただそう感じるのだった。もしかすると、あの夢に出てきた奴らのせいでは無いのか、そう思えた。しかし、こんな馬鹿みたいな考えを誰にも言う事は出来なかった。皆、笑うに決まっているからだ。

自分にしか見えないという意味不明で頭がおかしくなりそうな霧に、遙の神隠しに、とんでもない状況の無残な死者に、村中の地蔵の破壊……。これが全部、人間がやる訳が無い。しかも、出来る訳が無い事もいくつがあるように感じる。

だから、あの家族のせいだ。どう考えてもその結論に至った。

たとえば、そう結論づけるとする。しかし、どうやってそれが、あ

の家族がやったという事を証明できると言っただ。しかも、証拠を見つける事が出来るとは、といてい思えなかった。

「一樹。お前は、本当に五十嵐がやったと思うか？」

「いいや。やってないよ。というか、皆そんな事は分かってる。ただ、そういう事なんだよな。」

司はなんともなしに彼に聞いてみた。しかし、彼の答は司の求めている答えでは無かった。それ所か、それ以上の事を言われた気がした。

「どついう事だ！？一樹！！それって……。」

慌てて一樹の肩をつかんで問いつめてみたが、一樹は言うてはいけない事を言ってしまったかのように口を噤んで、すまなさそうに司を見つめた後、彼の肩を振り払い、一樹は司の向かう家の逆方向へと走り出してしまった。

司はただただ、その後ろ姿を見つめていたのだった……。

その夜、村にはありえないはずの侵入者が車のエンジン音と共にやって来た。その車は、不吉さを称えて真っ黒な色をしていた。その車は、少しずつ村へ近づいて来る。中には、一人の少年と二人の少女が乗っていた。彼らは親子であるように見えた。

少年は、後部座席で最初は大人しく座っていたが、我慢出来なくなったのだろうか。突然立ち上がり、父親とみられる男の座っている座席に身を乗り出した。

「父さん！！もうすぐ着くの！？」

「そうだな。もうすぐ着くと思うぞ？道とかに関しては、私は分からないから母さんに聞いてみなさい。」

その問いに父親は、後ろを向いて不気味な笑顔を見せつけながら答え、母親の方に視線を投げかけた。

少年は、父親の言うとおりに母親に視線を向けた。

「母さん？父さんは、ああ言っているけれど、もうすぐ着くんだよね？」

「ええ。着くと思うわ。御霊は不安なのかしら？」

母親はニコリと微笑むと、御霊と呼ばれた少年を傍に引き寄せながら言った。そして、息子の頭を痛いと思わせるくらいになでつけた。少年は、迷惑そうな不満げな顔を見せて、母親の手を振り払った。

「母さん！！止めてよ！恥かしいから！」

その息子の拒絶の言葉を聞いて母親はピタッとその行為を止めた。

「あら。ごめんなさいね。それよりも、御霊。あなたは、この村に入る事が不安なの??？」

母親は謝った後、もう一度尋ねた。御霊と呼ばれた少年は、それを聞いた瞬間、不安げな表情を浮かべた。そして、その表情は少しずつ恐怖の色へと変わっていった。そして、恐る恐るゆっくりと頷いた。

「怖い・・・かな。だって、僕はあの中に入ることは“許されていない”んだから。母さん、それが分かっているのに、どうしてここに入ろうとするの？」

「入る必要があるからよ。それに、今は許される必要は無いわ。あなたを否定する存在はもう“いない”んだから。あなたを否定する物は、全て壊したわ。あなたのために。」

「本当に？」

「ええ本当よ。」

二人はきつく抱き合った。母親の子供に向けるまなざしは、慈愛に満ち溢れていた。そして、母親は優しく彼の頭をなでた。

「大丈夫よ。あなたを破壊するものはもう無いわ。だから、安心して入れる。さあ、今から村へと入るのよ。」

母親がそう言っていると、車は村の中に入った。その瞬間、村中の空気が一気にゆらめいた。そして、その村の入り口には境界線が現れた。

その境界線は、車が押し進んでいく度にひび割れていった。そして、車がその境界線を通り抜けると、それは崩れ去って行った。

「お母さん、今のは何なの？」

御霊は、その様を見て少しの不安を覚えた。その境界線に恐怖を抱いていた御霊だが、その境界線がいとたやすく崩れた事に驚きを隠せないでいたのだった。そんな不安でいっぱいになった御霊をなだめるように、母親である彼女は大丈夫だと諭した。

「あの境界線は、“とある人物”によつて創造された物だったの。でもね、母さんは地藏とか壊したでしょ？だから、色んな物を拒絶する物はもろくなつていたのよ。だから、あのような現象が起きた。これは決まっている事だったのよ。だから大丈夫なの。安心なさいな。」

「うん……。」

母親の説明に御霊は少しばかり納得できずにいたが、その思いを断ち切りこくりと頷いた。御霊のその行動に、まだ納得していない事を察した彼女は気づかないふりをして微笑んだ。

「それよりも、初めて食べた人間の魂はどうだった？おいしかったでしょ。」

「うん！おいしかった！この村に入ったらもつと食べれるの??？」

「ええ。食べれるわよ。それは……たくさん……ね。」

御霊は、その母親の言葉に気をよくしたのか、先ほどまでと打って変わった朗らかな笑みを見せた。その様子を見て、母親も一緒に微笑んだ。

「我慢よ。もうすぐ着くんだから。」

子供は少しむくれるそぶりを見せたが、すぐに笑顔になつて答えた。

「うん！分かった！我慢する！」

その言葉に先ほどまで黙っていた父親は沈黙を破り、豪快に笑つた。「ワハハハハハ。そうか。御霊はえらいな!!!男は我慢するのも大切だぞ。それを忘れるなよ。」

その叱咤激励の言葉に、御霊は元気良く返事をした。

「はぁ〜い！」

「楽しみだな〜。おいしい人間の魂を食べるの……！」

クスクスクス

その時、村中で御霊の笑い声が聞こえた。しかし、その声を聞く者はいなかった……。何故なら全員寝ていなければいけない時刻であったからだ……。

そして、3人に乗せた車は村の中心のとある一角にとどりついた。そこには、300畳はあると思われるほどの大きさの家が不気味な色を醸し出しながら建っていた。

「ここが新しいおうちのの？」  
御霊の好奇心に満ちたその問いに二人はただ頷いた。

そして、その時母親は上空にいる者に気がついた。上空には、司がこちらを見ていたのだ。

母親の正体は、先日に夏野一家の前に現れた黒樹という苗字を名乗る女であった。彼女は、司がこちらを見ている事に何故かとてもない喜びを感じた。

「司君。ついあなたも力を手に入れたのね。その夢見の力……。母さんと同じ……。未来を見るその力。もうすぐあなたに再会出来るわね。本当のあなたと……」

彼女は誰にも聞こえないくらいの声でそう呟くと、二人と連れて家へと入って行った。

司は一樹と共に、学校へと重い足取りで向かっていった。

二人が学校に着くと、普段通りならばまだ登校中の生徒がたくさんいる時間で賑わっているはずの校庭には、誰もおらず閑散としていた。その事に違和感を感じるが、二人はお互いに感じないふりをした。そして、一樹はふと何かを呟いた。

「聞いてないぞ……」

「ん？何か言ったか??？」

一樹のすり減りそうなか細い呟きの声を聞き取る事の出来なかった



司は、首をかしげた。何を言ったのか聞いてみるが、一樹は言つて無いと断固として答えるだけだった。そんな彼の様子は、何処か追いつめられた子羊のようであった。

そして、校舎の中に入り廊下を歩いているとチャイムが鳴った。二人は、その事に驚いた。いつもより30分も早いからである。とりあえず二人は、焦つて教室へ先程までのゆっくりとした足取りとは比べものにならないくらいの速さで走った。息を荒らげながら教室に入ると、そこには他の生徒である皆が、俯いて自分の席に座っていた。いつも誰かが休んでいたこのクラスで、全員の生徒が集まった事に司は驚いた。

「いつたい・・・どういう・・・？」

司はかすれた声でそう自問したが、それに答える物は何も無かった。二人はお互いに目くばせすると、自分の席にイソイソと向かい座った。そして司は、隣にいる大竹という名の友達にどういふ事なのか尋ねた。しかし、その大竹も知らないと言ってソツポと向くだけであつた。

何かがおかしい。そう感じた司だったが、何がおかしいのか分かつかねていた。

そんな時、丁度良いタイミングで先生が、ガラガラという音を立てて教室の中へ入ってきた。そして、生徒全員が彼の後ろを歩く少年に気づいた。それは、司が見た夢でいた少年の姿であつた。身長は司と同じくらいであるが、体格は司の少しだけがっしりした体格とは異としており、やせ細つており、顔は青白くやつれていた。そして何故だが、その顔には冷酷な笑顔が広がり、まるで自分たちを餌と見ているような目をしていた。

そしてそんな少年の訪問に司を除くクラスの全員が驚きでどよめいた。

「どうして転校生が？」

「おかしいぞ。そんなの聞いてない！！！！」

「何なんだ！！！！」

「こんなに早くアレが……。ケースが……」

「想定外の事だわ。」

そして、司には何を言っているのか全く意味の分からない言葉があちこちで飛び交った。彼は一樹をチラッと見たが、一樹も何か爪を噛んでブツブツと何かを呟いていた。その光景にゾットしたが、押し黙って冷静を装いジッと入ってきた少年を見つめた。転校生だと思いが、何故皆そんなに転校生という存在に驚いているのだろうか、まるで“存在してはいけない”者がやって来たような……。そんな風に感じた。

先生はその教室中の騒然とした空気を受けていたが、まるで最初から想定内だったのか何の反応も見せずにスタスタと少年を引き連れて黒板の前に立ち、彼の名前を書きながら紹介した。

「ええ」とだな、今日は転校生を紹介する。黒樹御霊君だ。皆、よろしく頼むぞ。」

「こんにちは！黒樹御霊です！よろしくお願いします！」

御霊は学校中に響き渡るのではないかというくらい耳を劈くような大声で元気に会釈しながら挨拶した。

しかし、彼が会釈し頭を上げた瞬間、司の脳裏にゆがんだ冷酷で無邪気な声が聞こえた。

「おいしそうだな……。ジュル……。誰から食べようかな？」

その言葉にゾットし、司は辺りを見回した。誰の声なのか、司には見当がつかなかった。

「神鳴司。おいしいそう。」

更に声が聞こえた。それで司は気づいてしまった。目の前の黒板の前で立っている御霊という少年がこちらを物欲しそうな目で見ていることに……。

恐怖による寒気を感じた司は、負けるものかと御霊をジッと見返した。すると、その彼の行為に面白いと感じたのか、嘲笑と嬉しさという複雑に混じった感情の籠った笑みが浮かんだ。

そして司は、恐る恐る隣にある空いている机を見た。まさか……。司の嫌な予感は的中した。先生は御霊の肩を叩いて、司の横の誰もいない席を指差した。

「黒樹。お前の席は、神鳴の隣だ！さあ、行け！」

「はい！」

御霊は我が意を得たりとばかりにニヤリと笑うと、走って司の隣の席についた。そして、御霊はニタニタとおいしそうだと言うような笑みを張り付けたままに、司の方へとゆっくりと音が鳴るのでは無いかというくらいの遅さで振り返り、司に手を差し出した。

「神鳴君……。だよね？？？よろしく！」

「あ、ああ、よろしく」

司は、その差し出された手を握り返しながらそう返すと、御霊は覗き込むように手を握ったままに司を凝視した。

「うわあ、近くにいとすぐわかる。こいつ……。おいしそっうだなあっ！」

司はまた聞こえたその声に、吐き気がこみ上げた。誰かこのおかしい声に気づいていない物かと辺りを見回してみるが、誰も気づいた様子は全くなかった。それどころか、こちらを見ないように必死になっっているだけの光景しか見る事は無かった。

うんざりした司は、盛大なため息を吐いて御霊の手を振り払った。すると、彼は心配そうに司の顔をさらに近づいて覗き込んだ。

「どうしたの？神鳴君！」

「いや、何でもない……。」

その問いに焦った司は、なんでもない風を装って、黒板を方向を向いた。そして、授業は何事も無かったかのように始まったのだ。そして、その時に気づいたのが、御霊はとてつもなく頭が良かった事であった。先生は、たまに生徒に大学生でも解けないような数学の問題をイタズラで出すだが、彼がいとも簡単にそれを解いてみせたからであった……。

その光景に全員が、息を飲んだ。しかし、それと同時に生徒全員が

突然、彼に友好的になったのだった。そして、全ての授業が終わるころには、彼は全員と友達になってしまっていたのだった。司は、その光景にただただ違和感と恐怖を感じるのだった・・・。

第一部 第三話 来訪者。(後書き)

この部分は、たいしてお話は進んでないですね(；・・・)  
次回も 話は進まない気がします(；・・・)

さらには、文章がひどく嫌な感じですよ〜。

これって狙って書いているんで、そこらへんも第一幕の最後にどう  
やって繋がるかを考えてくださるのも面白いと思いますw

多分、しばらく話は動かない・・・かも・・・？  
そんな感じのこの小説です(；・・・)

第一部 第四話 逃亡へ。？（前書き）

これからの展開も含めて 読んだ方は気づくかもしれませんが。  
最初らへんはモブキャラばっかです。

ご了承を……。

それと、逃亡へ。はもうちょっと書きたかったんですが、時間の都合上？…？って感じに分ける事に……。ご了承ください……。

## 第一部 第四話 逃亡へ。？

大和村の境界線の範囲にギリギリ入っているとある町が、村の山向こうに存在していた、その町の名前は、『醤油町』というふざけている事甚だしい名前である。この町の前の名前は、『石川町』という普通極まりないところであったので、何がどうなつてこういうネーミングの町が生まれってしまったのか。村の人間達の噂になつている。だいたい30年ほど前から。それほどにふざけた名前の町である。

この町にはある特色がある。それは、この町には学力水準が無駄に低い人間しか住んでいないところにある。それはもちろん、勉強出来なくて運動が出来るとか、それ以外の才能があるという人間はいるのだから、それさえもない人間がここには集まつていた。

そして総じて、そういう人間は全員、不良になつていた。もちろん、大和村にもそういう人種はいるのだが、この町では『なんちゃって不良』しかないのだった。頭が悪すぎて『なんちゃって不良』な俺カツコイイ！！と思つてしまつている残念な人間しかないのであつた。

実は、村人達の噂の的になつて『醤油町』という冗談極まりない名前も、画数が多いからという訳のわからない理由から来ていた。そして、この町の住民は全員、背中に『醤油国民』というふざけた彫り物をしなければいけなかつた。それが故の『醤油』であつた。ただ残念なのは、『油』は別に画数が全くもつて多くないという点であろうか。どうせなら、『薔薇』にでもしとけばよかつたのであろうか。

そんな訳で、そういう人間しかこの町では存在していないので、困つた事に、法律のほうも少々（かなり）めちやくちゃになつてい。た。そのせいで、パチンコは未成年でも出来るし、お酒飲み放題、タバコも吸い放題、麻薬も摂取し放題の混沌とした町になつていた。

町中が寂れていた。

その町のパチンコ店でパチンコを打っている一人の少年がいた。司と同級生の五十嵐卓巳であった。卓巳は、舌打ちを繰り返しながら、パチンコを回していた。現在は、フィーバー中でパチンコ好きなら、テンションがすごいことになっている状況であるが、彼はどうしてかいらついていたのだった。

それは、自分に対して向けられる視線のせいであった。大和村の村人たちは、彼が悪人であると信じており、いい行いをするを良しとしていないのだった。だから、その期待に卓巳は答えてしまいい、村人たちの求める通りの不良になつていった。小さい頃は、その事に何の違和感も感じていなかったが、大きくなつていくにつれて、その状況に嫌悪感を感じ始めていた。そして、とどめに最近の噂である。つい最近、村中の神社仏閣や仏像などが壊れてしまった事のせいであつた。それを村人たちは、彼のせいにしたのである。

彼は、激しい怒りだけしか感じなかった。そして、この村の異質さに気付いたのだった。そして、最悪な環境であるにも関わらず、村よりもマシとばかりに、『醤油町』に逃げてきたのだった。ここに一旦逃げてしまえば、

「たく、あの五十嵐の所の馬鹿息子は……」

「あの五十嵐の所の馬鹿はまた悪さを……」

などと言うような、村人たちのひどい当てこすりのような陰口を聞かずにすむのだから……。

そして、まだフィーバーしていたが、やはり卓巳の怒りは収まらなかつた。そして、しまいには愚痴を吐き出していた。

「ちっ、あの村の糞はあ共が！俺は何もしてねえのに！地蔵何か壊してねえのによ！ふざけんな！だいたい、あの村は敷地が広い。しかも、あんなもん壊して何があるんだって言うんだよ！！あんなを一日で！？はっ！！無理にきまつてる。車を持ってても無理だよ！！！！」

卓巳はパチンコを睨みつけながら、村への文句をたれた。そして、



何かを思い出したのかひらめいたかのように文句を続けた。

「そうだ！！それに、俺は見たんだった。夏野の家のやつらが地蔵をぶっ壊してたのを見たんだっ！俺がやったわけないんだ！でも、あの夏野の家のやつらが？あいつらは、そんな事するたまじゃねえはずだ。誰かが、脅したか何かしたんだらうか？それがいつたい誰なのか、聞き出してやる・・・っ」

これはもはや文句でなく、推論とかになっっていたが、彼は意気揚々と一人で勝手に宣言すると、パチンコを放って村へ行こうとしたが、その時、彼の背後からテノールのような美しい男の声が聞こえた。

「おやおやそれは困る。君とは少しお話ししないとイケないな。五十嵐卓巳君？」

卓巳は、その声に驚き思い切り後ろへ振り返った。その振り返り方はあまりにも早く、残像が見えるほどに早かった。そして、卓巳はその声の人物を見た。男であるのは、声からして分かっていたが、その人物はとてつもなくガタイが良い男であった。ガツシリとした体つきをしていた。そして、その体つきに似合うような風貌をしていたが、男から見てもわかるほどその顔つきは精悍な顔つきをしていて、誰もがイケメンというような顔であった。しかし、彼には・・・。

「誰だっ！お前は！ん、待てよ・・・？お前、目が・・・っ。なぜないんだ・・・！？」

卓巳は男の風貌を見て驚いた。彼には、その言葉の通り、目がなかったのだから。しかし、卓巳がそう言った途端に、男はケタケタと君の悪い感じで笑いながら、目を閉じてしまった。そして、愉快そうに言った。

「実に困るなあ・・・。夏野さんのお宅がやったのを見た人がいたとはなあ？あ、そうだ。申し送れました。黒樹と言います。そして？あなたは本当に見たのですか？その現場を・・・。」

黒樹と名乗る男は、念をおすようにそう尋ねると、卓巳は何を思

ったのか、彼に不信感を感じていたのにも関わらず、その瞬間、黒樹に対して何の不信感が体から吹き飛ばされ、正直に答えてしまった。

「そうだが……。それが、何だ？あんたに、関係があんのか？」

その卓巳の答えに、黒樹は困ったかのように顔をゆがませた。

「それは、大変な事になりました。“彼ら”以外に見ていた人間がいたとは……。まあ、丁度良い事にあなたは地蔵を壊したと疑われるようだ。あなたには、しんでもらうしかないですね。っていう訳で、「遺書を書け」」

その黒樹の声は、先ほどまでただテノールのような声であったのか、聞くだけで恐怖を感じさせるほどに底冷えのする恐ろしい声であった。

卓巳は、最初は何を言っているんだと感じたが、突然、その声は再び頭の中でこだまし、遺書を書かなければ行けないと感じてしまった。卓巳は目の色を変えて、受付のある方へ行った。そして、受付の女性に手を出した。

「おい、紙とペンくれ。」

卓巳がそう言うと、受付の女性は柔らかな笑みで分かりましたと云うと、受付のカウンターの中から、紙とペンを卓巳に渡した。

「これでよろしいでしょうか？五十嵐卓巳様？」

卓巳はうなづくと、再び黒樹のところに戻った。そして、遺書を書き始めた。その時、ふとどうして受付の女性が、自分の名前を知っているのか不思議に感じたが、彼は遺書を書かなければいけないという気持ちでいっぱい、その考えも一瞬で吹き飛んでしまった。

遺書をすべて書き終えると、その途端に、スウッと意識は闇の中へと引き込まれていった。そして、何かが彼を暗闇へと引きずって行ったのだった。

そして、翌日。彼の遺体と遺書が、村のとある唯一壊れていない寺の前で見つかったのだった。

第一部 第四話 逃亡へ。? (後書き)

さて、今回は モブキャラっぽいのが出ませんでした。ご了承ください……

次回は、ちゃんと主人公出てきます!!!

って訳で 遅くなりましたが、久しぶりの更新でした。

次回の更新は、出来たら明日か水曜日になると思われます!

第一部 第四話 逃亡へ・・・（前書き）

逃亡へ……。は、ページ数少なめで進もうと思います）……（  
じゃないと、すんごくテンポ遅く感じる気がするんで。

## 第一部 第四話 逃亡へ - ?

司は、家の中で一人椅子に座って思案していた。その思案している姿は、あまりにも鬼気迫る物があった。彼の目下の思案対象は、勿論、御霊という名前の少年とその両親についてである。あの家族が来てからというものの、周りのすべてが変わって見えるのだ。何処をどう考えても変わってしまった事に司は気づいた。しかし、司以外の人間はそれには気づいていないのだった。この状況に、司はかなりの気持ち悪さを感じた。

しかも、御霊の存在自体はおかしいというレベルを超えているのだ。御霊はクラスメイト全員を見渡しながら、3日連続で彼らを「美味しそう・・・食べてしまいたい・・・。」と涎を垂らしながら言っているのに、誰もそれを気味悪がらない。というよりも、見えていないのだった。彼の自分を食べ物でも見ているかのような熱い視線に、司は胸やけを毎日感じていた。最初の2日くらいは、自分だけが空耳で聞こえるだけ。もしくは、幻聴を聞いているのだと思っていた。しかし、3日目にはそれは顕著になり、目の下には大量の隈があり、目は寝てないのか窪んでいた。あまりにもその飢餓感が彼にはあり、我慢している結果に感じる。

そう考える司は、ありえないとばかりに首を思い切り振った。違うと自分の中で反芻する。しかし、どうやって自分を否定していても、御霊の気持ち悪い姿を思い出して、それは幻想では無いと頭の中で反響するのだった。

司は、イライラして、髪の毛をくしゃくしゃにして、イライラを紛らわせた。

そして、丁度その時、五十嵐卓巳は死に、その死体は、その日の夜中に発見されたのだった。

翌日の早朝、司は五十嵐卓巳の遺体が発見されたと言う、司の家の目と鼻の先の畑のある場所へ向かった。遺体はまだそこにあり、外傷は全く無く、死因が不明だとその場にいた親戚の叔父さんに教えられた。その叔父さんは、最近の夏野家の遺体も死亡判定もしている吉田健二叔父さんである。彼の死因は、『心不全』とされるだろうと吉田は悔しそうな顔で声を震わせて言った。ふと吉田の手を見てみると、悔しさからくる怒りの感情のためか小刻みに震えていた。その様子に違和感を感じた司は、思い切って聞いてみた。

「なあ健二叔父さん。健二叔父さんって確か、一時期都会にいたよな？その時に、『心不全』とされる遺体が無駄に多くてビックリした。っっておどけた感じで言ってたけどさ。今の叔父さん。なんか、あの時とは全然感じが違う気がするけど。五十嵐の遺体に何かあるのか？」

そんな司の問いに吉田は、突然憑き物が取れたかのように、震えが止まり、力を抜いて盛大なため息を吐いた。そして、司の方を向いて悲しげに微笑んだ。

「司君にもばれてしまったか。正仁の奴にもばれちゃったよ。ただな、君の事を思うと怒りが込み上げてくるだけなんだ。」

「まさか、この事件、俺と何か関係があるの？」

「あるよ。」

吉田の言った言葉に、司は心の何故かで納得している自分を感じた。この事件を起こしている人物が、あの御霊であるならば、自分に関係ある事にしっくりくるからである。しかし、吉田はどうしてその事に気づいたのだろうか。その事について司が訪ねようと口を開く前に、吉田は続きを話し始めた。

「何故この事件と君が関係あるのかについてだけだね。犯人については、全く分かっていないけれど、被害者には俺だから気づく共通点があった。君だよ。まずは、遙ちゃんだね。君のガールフレンドなのだから、君と関係があつて当たり前だ。」

「違う！ガールフレンドじゃない！！！」

司は、話の途中であるが、遙が自分のガールフレンドである事に対してツツコミを入れた。勘違いも甚だしい。自分と遙が付き合うなんてありえない話である。多分……。遙が自分に気があるそぶりを一回も見せていなかった。見せなかったはずだ……。そんな司の葛藤を、吉田は挑発するような笑みを浮かべると司の頭をくしゃくしゃした。司の身長は172cmあるが、吉田の身長はそれより遙かに高く、190cmもあつた。それゆえのこの行為だろうが、司はかなりの恥ずかしさを感じ、顔はユデダコみたいに真っ赤になつていた。

「おうおう。違うだよなあ。ガールフレンドじゃないんだよなあ。」

「そうだ！！！！てか、この頭なでるのやめろよ！！！！」

司が噛みつくように言うと、おお怖いと思つてもない事を言いながら吉田は続きを話し始めた。

「それでだ、遙ちゃんと君は幼馴染だな。そして、その次の夏目美香さん。彼女は、君のご両親とともに仲が良かったはずだ。そして、五十嵐卓巳君は、君と同級生だな。それに、卓巳君は君とだけ仲が良かったんじゃないか？他の誰もが当たり前のように彼を避けてたが、君だけは違ったから彼も君にだけは心を開いていたと思うよ。遙ちゃんや美香さんだけなら、君との共通点とは別に言えな

った。しかし、卓巳君に関しては、あの二人から考えると君しか共通点が無いんだよ。後あるとしたら、君の弟妹の望君と呼読視ちゃんくらいだ。」

司は、吉田の説明にただただ頷いた。そうなのだ。共通点は、どう考えても自分しかないのだ。弟たちも、彼とは知り合いではあるが、司ほどの仲ではなかった。この吉田の説明は、司の考えをすべて肯定していた。しかし、少し疑問が残る。実は、卓巳は地蔵を壊したと疑惑がかけられていた。そっちは、どうなっているのだろうか。

「健二叔父さん。そういえば、卓巳って仏像とか壊したとか言われてたけど、それはどういう方向に進んだんだ？」

その問いに答えるかのように、吉田は無言で司に一枚の手紙を手渡した。それは、メモ帳に文章を殴り書きしているだけのものだった。それには、こう書かれていた。

遺書

皆様、ごめんなさい。

地蔵を壊したのは私です。

死んでお詫びいたします。

五十嵐卓巳

こんな事が書かれていた。しかし、司にはこれはありえない事で



あると分かっていた。卓巳は、遺書を残すような人間は自分以外にはいなかった。それに、死因が不明なのに自殺である訳が無い。自殺なら死因がわかるような死に方をしているはずである。それに、卓巳は例え俺にしか遺書を残せないとしても、遺書を書くような人間じゃ無いのだ。これは、ますます御霊が関わっているようにしか感じなかった。ただ不思議なのは、同じである事だった。卓巳と筆跡が全く一緒なのだ。そっくりかどうか以前の問題で、違う所がないくらいに一緒なのだ。それに書く手が震えていたのだろう。そういう状況でペンを握る時の字のくせが出ていた。誰かにでも書かされたようだった。これも御霊が何かしたのだろうか。

そして最後に卓巳の顔をあえて怖いので見なかったのだが、ソッと見てみると、その顔を恐怖で見開かれていた。いったい何を見てしまったのだろうか。そして、もう一つ気づいた事があった。

彼には、“魂”が無かったのだ。小さい頃から、人の魂を見る事が司にはできた。それは、軽く濁ったような色から軽く光り輝く物までであった。しかし、村の人間のほとんどが軽く濁ったような色をしていた。司の関わる人物だけは、不思議と光り輝いていた。卓巳も勿論、光り輝く魂を持っていたのだが、それがごっそりと無くなっていたのだ。顔を見てそれに初めて気づいた。

司は、ここで自分という存在以外の共通点を見つけた。“魂”が3人共光り輝いているのだ。他の夏野家の人間は薄く濁っていたが、美香だけは光り輝いていた。それを吉田に伝えたい衝動を司は感じたが、吉田はいたって普通の人間なので何も言う事が出来ずに、司は、吉田に対して挨拶もそこに学校へと向かった。

その足取りは、誰から見てもわかるくらいに悲壮感にあふれていた。

第一部 第四話 逃亡へ・・・（後書き）

？へ続きますww

多分、？か？で終わりますんで、よろしくです>m（――）m<

てか、この調子だと 第一部だけで 100部いく気がします・・・

## 第一部 第四話 逃亡へ・・・（前書き）

次で第四話終わります。 長くてすいません（；、）  
今回は、ちよつとドロドロしています。  
でも、今後の展開にかなり重要なシーンなので、我慢してほしいで  
す（；、）。。。

## 第一部 第四話 逃亡へ - ?

「お〜いっ！司！」

とぼとぼと高校への道のりを重い何かを引きずっているような足取りで司が歩いていると、そんな彼に一樹が背後から声をかけて来た。その声を聞いて司は、何故か苛立ちを感じずにはいられなかった。今まで感じていなかったのだが、一樹の話し方がまるで素人の芝居のように感じるのだった。司はそんな彼の喋り方への苛立ちを隠す事なく、一樹の方を振り向いた。

そこには、アホみたいな顔している一樹が呑気に立っていた。それにもまた、司は苛立った。

「ああ、一樹。何かあったのか？お前の顔と喋り方。いつもにも増してム力つくな。」

「まあ、それが俺の特技だしな？」

司は、彼に対する暴言を本気で言ったのだが、一樹はそれに気づかなかったのか、冗談だと思ったのか、笑って肯定した。それが、さらに司の神経を逆なでしていた。実の所、司はこの一樹からも濁った色をした魂を感じていて、その奥底には光り輝く魂を感じていたが、今ではそれは全く無くなっていて、その部分が一樹への嫌悪感を招いていた。

「お前の特技ねえ。てか、よくそんなに呑気でいられるよな。万年馬鹿。遙が死んだって言うのに。」

司はいまだに馬鹿面をしている一樹に腹が立ってさらに彼を罵った。さすがの一樹もこれには怒ったのだろうか。司の顔を思いつきり力を込めて殴った。そのせいで吹き飛ばされた司は、殴られた部

分を手で押さえながら尻餅をついた状態で一樹を見上げた。一樹の顔には、今まで見た事のないような怒りの表情を垣間見えた。

「痛いじゃねえか。さすが馬鹿だな。何もかも暴力で解決しようとする。だから、お前は嫌なんだよ。」

「黙れ！！！！」

尻餅をついたまま司は、さらに何故だか一樹を罵った。罵るつもりは無かったハズなのだが、口から突然その言葉が出てきたのだ。殴られた瞬間から、司は彼に対する嫌悪感ひまると憑き物が取れたように無くなっていたはずなのだが、その言葉が現れた。その言葉を聞いた一樹は、さらに司の腹に蹴りを入れた。その痛みは壮絶で、司は腹を咄嗟に庇って、その場に俯いてしまった。

「お前なあつ！遙が死んだのは分かってるよ！！でもな、死んだ人間を悪口の種に使うな！！お前には、心が無いのか！？もしくは、あれか！？KYってやつか！？」

一樹の言葉に司は、遙の事について深い後悔の念を感じたが、しかし、なぜかまた一樹への悪口の言葉が口から放たれようとしていた。そして、司は動く気もさらさら無かったハズなのだが、突然体が動きだし、一樹と睨み合うように立ち上がった。その司の行動すべてが自分の意思を反していた。何かに操られているように感じた。司は、そこからさらに馬鹿にするように一樹に嘲笑していた。そして、また再び口から言葉が漏れ出た。

「KYはお前だろう。それに、KYみたいな死語使う方がKYだよ。っていうか、察しろよな。俺は、お前と会話したくないんだよ！！！！そういう空気が俺から出てるだろうが！！！！察しろよ！！！！KYが！！！！」

一樹はこの言葉にさらに切れて、今度は司に暴力をふるう事は無かったが言った。

「お前なあっ！言うけどなあ？お前の方が圧倒的にKYだろうが！！！！」

司はさらに対抗するように言う。しかし、司はもううんざりしていた。もうこれ以上、一樹を傷つけたくなかったのだ。一樹の魂に司の言葉が突き刺さる度に心に傷が入っていた。

「もう何も言わなくて良いぞ。KY。KY菌が移るからな。」

一樹は司の言葉を無視して言った。その声は悲痛な叫びに変わっていた。司は本当に止めたくなかったのだが、何故か止める事が出来ないでいた。

「俺からも、慰めてほしいって空気出てるだろうが！！親友なら、気づいてくれよ！！！！」

一樹の言葉は、司の心を突き刺した。一樹の言葉からは、悲痛な助けを求める叫び声のような物を感じた。しかし、司にはそれを助ける事が出来なかった。そして、彼にさらに追い打ちをかけるような言葉が口からあふれ出た。

「出てない出てない。全く出てないぞKY野郎。お前の体中から気色悪い物が溢れ出てて、構ってチャンオーラを微塵も感じないぞ？  
？だいたい、俺らは親友じゃねえよ。カスが！！！！」

違う。違うんだ。そう頭の中で否定していても何故か口から言いたくもない最悪な言葉が溢れ出ていた。自分が御霊なんかより恐ろしく感じた。それに親友の一樹に、親友じゃないなんてありえない言葉を言ってしまった。もう嫌だ。

司の心はズタズタに引き裂かれていき、最後の言葉を放った瞬間に、目からは涙が溢れ出ていた。それは、一樹も同じだったようで、彼の目からも涙があふれていた。その量は、司の比にならないほどの量となって溢れていた。司はもう何を言おうとしても悪口しか出ないので、歯で思いつきり唇をかんだ。そこからは血がにじみ出ていた。

「俺たち、親友だと思ってたのに……。」

司は一樹の顔を見た。その顔は、もう何も語っていなかった。まるで魂がすっぽりと抜け落ちたかのようなのであった。魂の方も、濁っても光り輝いても居なかった。真っ暗闇になっていた。司の言葉がこれを行ってしまったのだ。もうどうしようも無かった。そして、最後の一樹の言葉は、一樹から司への最後の審判のように感じた。しかし、「勿論だ。」とか「俺たちは親友だよ!!!」と言いたいが、違う言葉が口から出そうになってしまう。

司が何も言えずにいると、一樹はそのまま何処かへ走り去ってしまったのだ。司は、しばらくその場で立ち尽くしていた。司の口の中には血の味が広がり、唇からは血がしたり落ちていた。

一樹は司から逃げるように森の中を走っていた。司の事を親友と思っていた分、その悲しみは大きかった。一樹は走っている時に、とある事に気づいた。司は泣いていた事に。そして、これ以上何も

言わないように唇と血がにじみ出るくらいに噛みしめていた事に。何かあったのかと突然心配になった。

「一樹……？」

しかし、そんな心配もすべて、後ろから聞こえてくるありえない人物からの自分を呼ぶ声にさえぎられた。その声の人物は遥であった。何故、遥の声が聞こえるのか。死んだはずなのに。恐る恐る後ろを振り返ると、違う事なく遥がいた。死ぬ前よりも綺麗な姿かたちをしていた。

「遥……？なんで、死んだはずじゃ……？」

実は、一樹は遥の事が好きであった。そのシヨックたるや、司より強い物だっただろう。そんな好きである人物が自分の前で立っていた。一樹に笑いかけながら。そして、遥は一樹に近づき、彼の頭をソッとなでた。

「一樹……。私は死んだよ確かに。だから、シヨックなのは分かるけれど……。それに、何か言いたげにしてるけど、今は黙って聞いてね。司はね、大変な事に巻き込まれているの。それも大きな何かに。そのせいで司は一樹にあんな事を言ってしまっただけなの。だから、司を許してあげてね。それじゃ、私は行かないといけないから。」

遥はそう言うと、一樹の前から一瞬で姿を消したのだった。そして、一樹の頭に彼女の手の感触だけが残っていた。一樹は、消えた途端に、周りを見回して彼女の姿を探したが、見つかる事は無かった。



「遙……。遙……。何処に行つたんだよ……。」

一樹はその場にしゃがみ込むと、目の前が光ったのを感じた。そこには、ただ笑っている遙の姿があった。一樹は涙を流しながら、嬉しそうな笑みを浮かべながら、その遙を追いかけた。遙は、どんと深い森の奥へと走つて行つた。それに追いつくように一樹は走つた。

そして、一樹は吸い込まれていった。深い霧の立ち込める森の奥へと……。

翌日の早朝。一樹は、村の森の入り口で幸せそうな笑みを浮かべながら死んでいる姿が発見された。

その一樹の死体を電柱の上から見つめてみる少年がいた。御霊だ。

「祐樹一樹 死亡

死亡推定時刻 不明

死因 不明

僕が魂を食べたからだけど。」

御霊は美味しそうな物を見るような目で、一樹の死体を見て、笑いながら言った。その声は、高く無邪気さを感じる声であったが、何処か常軌を逸しているような声であった。

「クスククス、祐樹一樹 おいしかったよお 君の傷つき、狂った魂、まさか、こんな素晴らしい魂を司君が拵えてくれるなんてね!!!」

しかし、司の名前を出した途端に御霊の表情は険しくなり、不機嫌になった。そして何故か考え込むような姿を見せた。

「それにしても、あいつ邪魔だなあ。神鳴 司。あいつは、僕の本性が見えてるみたいだし。何でかなあ？」

しばらく司について考え込むような姿を見せた御霊であったが、一樹の元へ泣きながら走りよっていく司を見て、考えるのを止めて、クスッと忍び笑いをもらった。しかし、その笑い声が聞こえたのか、司がこつちを振り返った。それに驚いた御霊は、司から逃げられるように瞬間移動し、高校の校舎の中へ移動した。そして、頭から流れる冷や汗を制服の袖で拭った。そして、大きな声で愉快そうに笑った。

「いやあ。焦ったなあ。なんで僕の事分かつちゃうのかなあ？これは、もうちよっと様子見ようかな 面白そうだしねえ」

そして、御霊は司の魂を見た時の感覚を思いだした。真っ白に光り輝く魂。しかし、その中には真っ暗で見ているこつちが吸い込まれそうなくらいに真っ暗な魂がそこにはあった。御霊は、その魂にひどくそそられる物を感じた。そして、とある事を心に決めたのだ。

「そうだ、最後に食う魂は、あいつにしよう」

そう最後に食べる人間をこの場で御霊は決めたのだ。最後に喰われる者。

それは、神鳴司……。

神鳴司が喰われるまでの人数。

992人。

喰われた者。

7人。

第一部 第四話 逃亡へ - ? (後書き)

次で第四話終わります。  
すいません。長くてw

ちなみにこの話は、かなり伏線があり、物語の中心部分なので、しっかり読んでほしいです( ; . . ) ( . )

第一部 第四話 逃亡へ。？（前書き）

これで 第四話終わりなはずでしたが、追加シーンが思ってたより長かったなので、もう一回続きます。すいません（；・・・）

個人的に 第六話が一番書きたい部分なので、今年中に六話までは書けたら良いなと思ってます。

## 第一部 第四話 逃亡へ。？

司は、高校に着くと教室に入り、自分の席に着いた。そんな彼の所に、一人の男がやって来た。それは、司の友達の中で遙と一樹を除いた中では唯一の魂が光り輝いている人物である、坂下優人であった。彼は天才少年で、この高校で唯一、本来は校則違反であるノートパソコンの持ち込みを許されている人物である。

「司。おはよう。久しぶりだな。」

「ああ……。確かに、一か月ぶりくらいだな。何処に言ったんだ？」

優人は、一か月もの間、高校には登校して来なかった。その理由は、少しばかり（全くもって少しばかりではないが）村を出て、日本を飛び越えて海外に仕事をしに行っているらしい。科学の天才で他にもゲームのプログラムとかも担当していると言っていたはずである。司は全くやった事が無いが、弟の望に話してみるとかなり興奮していたので、結構有名なゲームを担当しているらしい。

「ああ、アメリカとイギリスかなあ。アメリカは、ちょっとゲームの開発の手伝いかな。海外版の方が不具合出たみたいで修正しに行った。後、イギリスは、知り合いが研究している分野で協力を頼まれたからそれを手伝いになな。」

「すまん。分かったが分からん。」

「だろうな。お前ゲームもしないし、成績も体育と英語以外は2か3だもんな。数学はたまに1だし。」

「それは、余計だ!!!」

優人とは、一樹の次に仲が良く、お互いの成績とかも知っている

中だ。(優人に関しては、聞くまでもなく遙と成績を競っている  
で、1位か2位のみだ。ちなみに、本人は適当なので凡ミスをよく  
する。)ゲームもこいつの研究など全く分からないので、話をす  
事が無いように見えるだろうが、お互いスポーツをやって見ても  
るので、そこで話が合っている。一樹よりもそこは意気投合して  
いる。そんな彼に司は違和感を感じた。最近、違和感ばかりで嫌にな  
る。

「そういえば、いつもより起源悪い気がするけど。何かあったか？」

「ああ。この村も危ないって感じたんだよねえ。」

「危ない？」

「ああ。危ないね。」

司は驚いた。自分と同じ考えを持つ人間がこの村にいたという事  
に。しかし、何故こいつはこんな考えを持つにいたったのだろうか。  
それを聞いてみると、優人は簡単だよと呟きながらノートパソコン  
を駆使してとある画像を見せた。

「この村つてさ、超がつくセキュリティ機能が実はあるんだよね。  
村中を監視しているみたいにさ。それでに付け加えて、この村の死  
亡者があまりにも多いから調べた訳だ。すると、少し怖い結果が出  
た。」

怖い結果……。その優人の言葉に司はとてつもない不安を感じ  
た。正直、死亡者は1000人中7人でそこまで多いとは思えない  
事にもそれはあった。司の疑問に答えるかのように優人は次にグラ  
フのような物を出して見せた。

「これを見たら分かるかもしれないけど、村の死亡者が、この1  
0年間一人もいないんだよね。正式にはもうちょっと前になるか。」

司のご両親が亡くなったので、この村の死亡者は最後だったから。これが、どういう事かわかる？」

「どういう事だ？」

もうすでに考える事を脳が拒否していたので、司はオウム返しして聞き返した。そんな司の中を理解した優人はしょうがないとばかりに、説明を再開した。

「ようするにさ、司のご両親は死んだけど年齢的に30前後だ。若すぎる。しかも、その前に死んだのも鳴海海斗という人物と鳴海夕菜という二人が死んだけれど、これもおかしい。彼らも司のご両親を同じ年齢だ。若いのが近い時期に死ぬなんておかしいよね。それもあるけれど、それから10年以上も人が死なないなんてありえない。この村には、100歳を超える御老人が10人いるんだよ。こう言っちゃ悪いけど、一人は最悪でもね、死んでないとおかしいんだ。」

「なるほど。じゃあ、この死亡率は逆に正常と言いたいのかお前は？今までが、異常だと。」

司は結局の所、彼の言葉を頭の中で整理して、要約した。優人は、正解と言う変わりに、指をパチンと鳴らすと、新たなpcの画面を見せた。今度は、動画のようだった。その動画の日付は3年前になっていた。画像の主は確か、中3の頃のクラスメイトの東雲春日である。途中で転校してしまった。それまでは、仲が良かった。

「これって春日だよな……。春日って転校しただけだろ？何が  
あるんだ？」

「この動画は、そのセキュリティシステムからハッキングして取  
って来たんだけどさ。興味深いんだよね。これが、良いから黙って  
見ててよ。」



司は黙ってその動画を見た。しかし、特に変わった様子を感じなかった。春日はいつも挙動不審で赤面症の子だったが、彼の記憶通りの行動をしている場面しか分からなかった。これの何がおかしいのだろうか。

「お前は、これを見て気づかないかあ。やっぱりねえ。じゃあ、教えてあげるけど。この動画は、10分以上再生されてるけど。この動画、あまりにも一人の人物に焦点を当てすぎていると思わないかな？」

「確かに、けどそれって普通じゃないのか？」

司のその疑問に優人は信じられないというような顔にすると、呆れたようにため息を吐いた。

「あのね、教えてあげるけど。よっぱどの予算が無いとここまで一人の人間だけに焦点当てる事は不可能だよ。しかも、実を言うと、1000人を超えるデータがあるんだ。ありえないんだよね。一介の村でこんな事が可能だなんてね。おかしいよね。」

「言われてみればそうだな……。」

優人の解説に、司は納得せざるを得なかった。この村はいつたい、どうなっているのだろうか。御霊以前におかしい所がたくさんあるようだった。そして、司はある事に気づいた。

「そういえば、この村の人口って1000人だよな。これってありえなくないか？死んだ人間がいなくても、産まれた人間がいるんじゃないか？それなのに、人口が変わらないなんておかしいんじゃないか??？」

「その通り！まあ、その答えは動画の続きにある。もうすぐだ。」

見てくれ！」

司は急いでパソコンの画面を見た。春日は、下校途中らしいが、突然後ろから誰かに羽交い絞めにされ、何処かへ連れて行かれた。場所は、研究所みたいな所であった。そして、恐怖で顔がひきつっている彼女の前に顔などは暗くて分からないが、男が現れ、彼女の頭をなでた……。そこで、動画の映像はプツッと途切れ、変わりに『the end』という文字が現れた。

「な！？これって……。何処かに連れていかれてるって事か！？」

優人は、それにただ頷いた。

「そうだな。これによつて帳尻を一部あわせている。けどね、もう一つ。醤油村っていうふざけた村があるでしょ。あそこってこの村から追放された人間の集まりなんだよね。そんな事をして、この村は何とか異質な形を保っている。でも、それには最後にひとつ必要な事があるんだよね。それは、村の大半の人間がこれに協力しなければいけないって事なんだよ。」

「じゃあ、ここにいろやつらもグルって事か！？」

「そういう事になるかな。」

司は呆然となった。という事は、これから何かが起こっても全てもみ消されてしまうって事なのか？もしかして、俺の近くの奴らもそうだったのか？一樹もそうだったのか……。司の中で様々な感情が渦巻いた。優人は、なくさめるかのように彼の肩をポンポンと叩いた。

「まあ、気にするな。それよりも、もっと問題がある。今までこ

の村に引越して来た人間がいなかったけど、この死人がたくさん出た丁度その時期に引越して来た家族。今回の転校生……。絶対、何かがあるね……。ほら、噂をすれば……。」

優人は、扉の方を向いた。扉の向こうから御霊が教室に入ってきた。その姿を見て、司は恐怖した。御霊の周りには、恐怖を感じるくらいに真っ暗なドロっとした物が溢れ出ていた。そして、御霊は司と優人を見つけるとニツコリと笑って、それを引き連れながらこっちにやって来た。

「おはよう。司くん。それと、君は坂下君だね？よろしく！」

御霊は優人に握手を求めた。優人はどうでも良さそうに握手を返して、それじゃと言って、自分の席に司を置いて、戻って行った。司は、キッと優人を睨みつけた。御霊は優人が去ってもまだこちらを見て、今度は不気味に下卑た笑みを見せていた。その笑みに、司は体中の神経が逆立ったのだった。

第一部 第四話 逃亡へ。？（後書き）

うーん。追加のシーンが思ってたより長くなってしまいました。

っていうか、結構。種明かしを追加のシーンで行っちゃいましたね。

まあ、そんな事しちゃっても支障が無いんで良いんですが。

ただたんに、今後にちょっとだけ出てくるはずの坂下優人クンをも  
うちよつと存在感あるキャラにしたいと思ったんで、こつという追加  
シーンを入れたんですよね。

後、逃亡へ。？での司の行動への整合性を出すために書いてみま  
した。

まあ、坂下君も今後あんまり出さない予定でしたが、ちょい出しす  
ると思うんで、その時はよろしくやってください。m

m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8632x/>

---

Red Blue ~灼碧の瞳~

2011年12月29日02時55分発行